
碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

魔王VSデビル涼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧の軌跡〜つながる姉妹の絆〜

【Nコード】

N6530X

【作者名】

魔王VSデビル涼月

【あらすじ】

「私の姉は輝いてる・・・だからかな、私みたいな汚れた存在があの人の傍にいちやいけないんだ。」

これは、イリアの義理の妹が主人公のオリ主もの小説です。

駄文ですがその辺は気にせず読んでいただけるとうれしいです。

オリ主や原作崩壊が嫌という人は回れ右です（笑）

プロローグ（前書き）

オリ主のクラフト技は何にしよう・w・

プロローグ

??? side

「はあ……………」

夜空を見上げ溜息を吐く1人の女性がいた。

アルカンシエルのメインヒロイン、イリア・プラティエである。

「あれからもう8年…あの子は元気にしてるのかしら。」

イリアは懐から1枚の写真を取り出して当時を思い出すように見る。

「昔はよくセシルと一緒に3人で遊んだっけ。」

そういえば一緒にお風呂に入ったこともあったわね、あの子ったら顔すごく赤くして…ふふふ、本当にあの頃は楽しかったわ。」

昔を懐かしむその顔は、普段リーシャをからかって楽しむ顔とは別の愛おしい誰かを思う優しさに満ちた顔をしていた。しかし、その顔はすぐに後悔の色に変わる。

「もうあの頃にはもどれないのかしら…」

あの時、自分がもつとあの子を見ていればこんなことにはならなかったのだと過去を後悔するように呟く。

「いつか…またいつか会えるわよねきっと……リリース………」

その小さな囁きは誰の耳にも届かずただ夜の闇に溶けていく。

??? side end

リリース side

ワタシヲ ミツケテ

眩しい…もう朝ですか。

なにか夢の中で女の子の声が聞こえた気がしますね、気のせいでしょうか。

「うっん」

なぜ朝はこうやって伸びをすると気持ちいいのでしょうか…
たまらなくどうでもいいですね。

考えてみれば私が姉さんの傍を離れて8年…長いようで短いように感じてしまいますね。姉さんは元気にしているのでしょうか…いえ。

「私に姉さんの心配をする資格はありませんね、私があの人元から勝手に消えてしまったのですから…。」

そつだ、私にあの人の心配をする資格はない。あの誰をも魅了し笑顔にする太陽のような姉の傍に私みたいな汚れた存在がいていいはずがない。

「さてと、そろそろ起きましょう。電車に間に合わなくなってしまうそうですから。」

では行きましょうか、

……………光と闇の混在する都市、クロスベルへ。

リリース

side
end

プロローグ（後書き）

小説ってむずかしいですね、文の書き方が雑です・・・
もっとうまくかけるようになりたいですね><;

オリ主設定（前書き）

設定変えました。

使徒より執行者のほうがいいかなという意見もらったので考えた結果こうしました。

直属の執行者とかありましたっけ？？

オリ主設定

名前：リリス・プラティエ

性別：女

武器：日本刀のような細身の刀、切れ味はけっこう鋭い。

容姿：ぶつちやけ黒髪の星光の殲滅者です。けっこう好きなキャラなので^^；

基本的に穏やかで物静か、とてもやさしい性格をしておりあまり争いを好まない。

過去にレンやティオ同様に教団に攫われた過去がある。

隙を見て逃げ出し衰弱して倒れていたところをイリアに拾われる。

戦闘力はかなりの腕前で各地を回っていたときに《身喰らう蛇》の第七柱アリアンロードに出会い、執行者に誘われたほど、本気を出したときはレーヴェをも上回る。

執行者候補としての二つ名は“迅雷”

リリス自体の名前はまったくと言っていいほど知られてはいないが、剣帝を超えるほどの力を持った執行者候補としての迅雷の名は有名である。

2月ほどアリアンロードとアリアンロードを補佐する3人の戦乙女

達と共に行動し、その時にアリアンロードに稽古をつけてもらったこともある。

本人曰く、なんであんなやさしそうな顔をしてるのに稽古の時は鬼のような形相をするのかとのこと。

戦乙女達の中では特にエンネアに可愛がられていた。

作者「まあこんな感じかな。」

リリス「ふむふむ、ネタばれがある気もしますが気にしないでおきましょう。」

作者「うん…気にしないでくれるとうれしいな……」

リリス「わかってますよ、ところで…クラフトとかは決まってるの？」

作者「うーん、大体決まってるんだけどまだ検討中かな。個人的に雪とか桜とかの文字を入れた技にしたいんだよね。」

リリス「ほほう、それはなぜです??」

作者「なんかかつこよさそうだし、簡単に決まりそうだからだね!」

リリス「……………」

作者「えっと…怒ってる？」

リリス「別にその考えが嫌いなわけではありませんが、一ついい技を思いつきました。
ちよつと試し打ちさせてもらってもいいですか？？」

作者「ほ…ほんと？いいよ見せて見せて……うん？試し打ち？試し切りじゃなくて？」

リリス「はい、ではいきますね……」

作者「なんか嫌な予感が……ていうかおもいつきりあれしか思い浮かばないんだけど……。」

リリス「ルシフェリオン・ブレイカアアアー！！」

作者「やっぱりかあ……！それはいろんな意味で駄目だよ……！
……まあもしその時はそれでいいかあ……。」

1話「出会い」

リリス side

「ということやってきましたクロスベルです。」

え？1人でなに言ってるのかって？なぜか言わないといけない気がしたからですよ。

グウ

「うっ／＼／＼そういえば昨日の夜から何も食べていませんでした。」

うっん、情報収集もしたいですが…お腹が減りすぎて倒れる…なんて恥ずかしい事態は避けたいですし…よし！ごはんを食べに行きましょう。

「たしかレストランは中央通りと東通りでしたね…今日は東通りのレストランでチャーハンでも食べましょう。」

私はこう見えてもチャーハンが大好きなんです。なんであの食べ物はあるのにおいしいのでしょうか。ほんとどうして……おっと、思

わず止まらなくなりそうでした。

つと、考え事をしてて気づきませんでした。がもう中央通りですね。
たしかオーバルストアの右側を通って…

「リュウ〜遅れてごめり、わわ」

「キーア!!」

うん？声がする方を見てみたら女の子が転びそうになってますね、
目の前で怪我されるのは嫌ですし…助けるとしましょうか。

私は瞬動を使い女の子を抱き抱えます。

「大丈夫ですか？」

「ふえ？」

やはり驚いていますね、知らない人がいきなり現れたのですから。

「えっと、お姉ちゃん誰？？」

「名乗るほどのものではありませんよ、それより怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫！！お姉ちゃんが守ってくれたから！！」

「そうですか、それはよかったです。」

笑顔で私に答えてくれる女の子、なぜでしょう…この子の笑顔を見ていると心があたたかくなりますね。

「キーア無事か！？」

「キーアちゃん大丈夫！？」

そこに私と同じくらいの年の男女が4人来ました。

「大丈夫だよ！このお姉ちゃんが助けてくれたから。」

「そうだったのか、ありがとうございます。」

男の人がお礼を言います。なんか年上の女性に好かれそうなオーラが見えますね…

「ありがとうございました。キーアちゃんを助けてくれて。」

灰色の髪をした女の人もお礼を言いました。どこかのお嬢様でしょうか…

「いえ気にしないでください。当然のことをしたまでですので。」

「それでもです。この子を助けていただいて本当にありがとうございました。」

うーん、そこまでお礼を言われるとは思っていませんでしたね。この二人は本当にこの子を大切にしているんですね。あ！もしかしてこの子は…聞いてみましょう。

「この子はお二人のお子さんですか？」

「「えっ!?!」」

「いえ、とてもこの子を大切にされているようです。」

「ち、違います！この子はちょっとある事情で保護した女の子なんです！」

「そうです！私たちは《まだ》そんな関係じゃありません！！」

二人とも動揺しすぎですね。女の人もまだって…まあ男の人は鈍感
そうでしたまだそんな関係ではないようですね。女の人フアイトで
す…。

「おっと、そろそろ行かないと授業に遅れるぞキア。」

「え？うわ！ほんとだ。じゃあ行つてきまゝす！！」

「「いつてらっしやい！！」」

微笑ましい光景ですね、そういえば昔私も姉さんにこんなふうに…
やめましょう。

そろそろ行きましよう…お腹が限界です。

「それでは私はこの辺で失礼しますね。」

「あ、今日はキアを助けていただいて本当にありがとうございます。
しました。」

「ふふ、本当に気にしないでください。あなた達とはそう遠くない
うちにまた会えそうな気がします。」

私はそう言ってその場をあとにした。

リリス s i d e e n d

ロイド s i d e

キーアが転びそうになり思わず大声を出してしまった。

キーアが怪我すると思ったけどそんなことはなかった。

気づいたら短い黒髪で整った顔立ちの女の子がキーアを抱えていたからだ。

女の子はすぐ行ってしまったけどまた会えそうだと言ってきた。

本当にそんな気がするのは俺の気のせいかな…

「不思議な子だったわね、すごく綺麗だったし。」

エリイが言う、やっぱり女性から見ても綺麗なんだな。

「たしかにな、俺と同じくらいの年なのかな。」

「ふ、リーダーはあの子が気になるのかい？」

「たしかに綺麗な子でしたね。女の私でも思わず見とれちゃいました。」

ワジとノエルが言う、

「でも…あの子の動き唯者じゃないね…まったく見えなかったよ。」

そこは俺もワジと同意見だ。本当に不思議な子だったな

「おっと、支援要請を忘れるところだった。早くレクターさんを探さない。」

「そうだったわね、早く見つけてしましましょう。」

「あの人どこ行ったんでしょか、いくらなんでも逃げ足速すぎます。」

「まあ、ただの秘書ってわけじゃないようだね。」

とりあえず歓楽街のカジノに行ってみるか。目撃証言もあるし。

ロイド s i d e e n d

リリース s i d e

ふう、初対面の人とあんなに話したのは久しぶりですね。

時間を使っただけと思っていましたが、まさかほしかった情報の一つがこんな所に入るとは思ってもみませんでした。

「……………キア、ですか……………あれが……………」

……………零の至宝……………。」

リリース side end

1話「出会い」（後書き）

疲れた、たぶんこれが一番長いかも・・・><
相変わらず駄文だな、ほんとにうまくないよ・w・

2話「驚愕！！神仙麻婆 麒麟」

リリス side

さて、零の至宝の少女に出会い幸先のいい旅になりました。

私自身あまり《碧き零の計画》に興味はありませんが…なんでしょう。

あのような小さな少女を贄にする計画というのは正直気に入らな

小さな子どもを生贄にする…非道さを除けばあいつらとやってることとは何一つ変わらないじゃないですか。あまり干渉はしないつもりでしたが…なんとか守ってあげたいと思ってしまいますね……。

でもそうした場合……アリアさんとも戦うことになるのでしょうか…。

私にできるのかな、一時とはいえ温もりを与えてくれたあの人達に剣を向けることが……やめましよう。考え出したら止まらなくなるのは私の悪い癖ですね。アリアさんやエンネアさんにも注意されていましたし…

グウ

……シリアスぶち壊しですよ私……

「はあゝ、ご飯食べてスッキリしましょう。」

グウ

うん？このお腹の音は私ではありませんね。
ということは……いつの間にか私の横にいたシスター服の女性でしょうか。

「あなたもこれからお昼ですか？」

「はい。朝にマフィンを5個ほど食べたのですが足りなかったようです。」

えっと、5個って食べすぎではないのでしょうか……。
私でも2個くらいが限界なのですが……。

「同じ時間にお腹が減り昼食を求めて出会った。これも空の女神のお導きでしょう。」
よければご一緒しませんか？」

え？それって女神のお導きなのですか？？

よくわかりませんが断る理由はありませんね、一緒にさせてもらいましょう。

「はい、喜んで一緒にさせていただきます。」

「ふふ、ではいきましょう。」

そして私たちは店内に入って行きました。

カラカラ〜ン

おお、やっぱり前来た時より綺麗になっていますね。
メニューのほうもけっこう増えていきますごく楽しみです。

「あそこの席に座りましょうか。」

「はい。」

こうして私たちは向かい合うようにして席に座ります。

「さてと、チャーハンをたのm、うん!？」

チャーハンを頼もうとしたとき私の目に飛び込んできた名前がありました。それは…神仙麻婆 麒麟…

なんかすごそうな名前です、値段も高いですね。

私が頼もつか悩んでるときに彼女が声をかけてきました。

「えつとあなたは………そういえば自己紹介をしていませんでしたね。」

シスター服の女性が気づいたように私に言います。

そう言われてみればそうですね、トントン拍子で進んだのですっかり忘れていました。

「私はリース・アルジエントといいます、この度クロスベル大聖堂に赴任してきました。よろしく願いますね。」

彼女はリースさんと言うのですか……あちらが自己紹介したというのなら私も名乗らなければいけませんね。ですがプラティエの名は伏せさせていただきましようか……私がその名前を名乗る資格はありませんから……

「私はリリースと言います、わけあって名前しか名乗れない無礼をお許してください。」

そういつて私が頭をさげるとリースさんが言います。

「お気になさらないください。なにか事情がありなのでしょう。詮索するという野暮なことはいないのでご安心ください。」

「ありがとうございます。そう言っていたけるとすごくうれしいです。」

私は満面の笑みで彼女にお礼を言いました。

「／／／」

うん？なぜか顔が赤いですね、熱でもあるのでしょうか。

「どうしたんですか？なにか顔が赤いようですが。」

「な、なんでもありません／／／。」

「そうですか…。」

風邪ではないのでしょうか、私がお礼を言ったあたりから顔が赤い

ですし……ほんとにどうしたのでしょうか。

リリースは自分の容姿がかなりいいということに気づいていません。その笑顔で微笑みかけられたら男女問わず見とれてしまいます。

「と、ところでリリースさんは何を注文なさるのですか？」

なぜか誤魔化された気がしないでもないですが……まあいいでしょう。

「そうですね、最初はチャーハンを頼もうと思っていたのですが……
気になった物があり悩んでいるんですよ。」

「気になったもの？」

「はい、これです。」

私はリリースさんにその名前を見せます。

「神仙麻婆 麒麟 ですか……聞いたことがありませんね。何やらすごそうですが。」

「それは私も思いました、だから気になっているんですけど……。」

「では二人でそれを頼んでみませんか？私も気になってしまいました。」

「そうですね、リースさんがよろしいのであれば私は構いません。」

「では頼みましょうか。そのウェイトレスさんよろしいですか？」

「はいはい！、ご注文はお決まりでしょうか！」

なかなか元気のいいウェイトレスさんですね。

私と同じくらいの年でしょうか、すこし上……のような感じがします。

「この神仙麻婆 麒麟 を2つお願いします。」

「かしこまりました！少々お待ちください！」

「元気な方でしたね。」

やはりリースさんも同じことを考えていましたか。

「はい、でもこちらまで元気になりそうで私は好きなタイプですね。」

「ふふ、そうですね。」

そうして二人で話しているうちに頼んだ料理が運ばれてきました。

「お待たせしました〜！こちらが神仙麻婆 麒麟 になりま〜す！
熱いうちにお召し上がりください〜い！」

「こ……これは……。」

リースさんが驚いていますね。

私もけっこ〜というかなんかなり驚いています。

「あ〜…リースさん、私の目の錯覚でしょうか。料理が輝いてる
ように見えます。」

「いえ、錯覚ではなさそうです。ほんとに輝いていますね。」

「おいしいです!!」

「なんですかこの料理は!?!こんなおいしいもの今まで食べたことがありません!!」

おっと、思わず大声を出してしまいました。他のお客さんが見えます／＼／

「たしかにものすごくおいしいですね、私も今までいくつもの料理に出会ってきましたがこんなおいしい料理は初めてです。ああ女神よ……あなたの巡り合わせに感謝致します。」

リースさんが感動しています、かくいう私も感動していますけど……そこにこの店長さんでしょうか?が近づいてきます。

「嬢ちゃん達いい食べっぷりじゃないか!そこまで感動してくれるなんてこっちも作った甲斐があるってもんだ!どうだ?俺のおごりだ、チャーハンもつけてやろう。」

「え?さすがにそこまで」ああ……あなたのご慈悲に感謝致します、ご馳走になります!」リースさん!?!」

「リースさん、店長さんのお心遣いを無駄にはいけません。いただきます!」

うつ、たしかにうれしいですがそれは……リリースさんが目をキラキラさせながら私を見えています。……はあ。

「わかりました。店長さんご馳走になります。」

「はっはっは！おうよ、すこし待ってな！！」

「リリースさんありがとうございます。」

「いえ、まあ私も食べたかったですし。」

チャーハンを頼む予定でしたから今回は役得ということと考えましよう。

そして私たちは運ばれてきたチャーハンを食べて店を出ました。

「今日は久しぶりに楽しい食事でした、リリースさん。機会があればまた一緒にしましょう。」

ふふ、そうですね。ほんとに今日は楽しかったです。

「はい、その時はまたよろしくお願いしますね。」

「それでは私はそろそろ行きますね。西通りのパン屋にも行かないとですし。」

「そうですね…（まだ食べる気ですかリースさん…）」
言葉には出さず私はその言葉を呑み込んだ。

「では本当に今日は楽しかったです。それではリースさん、また会いましょう。」

「はい。ぜひまた。」

今日はほんとに楽しかったですね。そこで私はリースさんと別れその場を後にした。

リース s i d e e n d

リース s i d e

「では本当に今日は楽しかったです。それではリリースさん、また会いましょう。」

「はい。ぜひまた。」

リリースさん…不思議な方でした。

偶然一緒にご飯を食べることになりましたがとても温かいというのが第一印象でした。

クロスベルにきて教会の人に警戒されて気が滅入りそうでしたが大丈夫そうですね。

前に出会ったエリイさんですがリリースさんともよき友人になれそうです。

しかし、リリースさんとの会話の中で時折見せる彼女の悲しげな表情

…あれは…過去になにかあった人が見せる表情です…。

私にはわかります。かつて、ケビンが姉さまを死なせてしまったことを悔やみ時折見せていた表情にそっくりですから…

「リリースさん…いつか私に話してくれる日が来るのでしょうか…」

リリース side end

2話「驚愕！！神仙麻婆 麒麟」(後書き)

店長さんの喋り方微妙です。

というより店長オリジナル感がバリバリです。

リースは食べ物には目がないということでもこんな感じかなと・
ちよっとはっちゃけさせすぎた氣もしますが・w・

3話「赤い星座との邂逅」

リリス side

ふう、お腹いっぱい満足です♪

リースさんの昼食を終えて私は次の目的地に向かっていきます。

せっかくクロスベルに来たのですからヨルグさんの所に顔を出しましょう。

1時期私のお世話をしてくれましたからね、私にとっては恩人といつても過言ではない人です。

まあ…そこで知ったんですけどね、《身喰らう蛇》が進めている《幻焰計画》

というものを……。

そしてアリアさんと旅をしている時に聞いたんです。

《幻焰計画》の通過点として《碧き零の計画》を発動させる必要があると。

つまりキーアを守るという名目で戦う場合は…否応なく蛇と対立することになる。

……ううう、今から憂鬱です、アリアさんに傷をつけることはできなくはないと思いますが、倒すとなると話しは別です……はあ、考えても仕方ありませんね。

そうこうしてる間に歓楽街ですね。あ……

「アルカンシエル………ですか………」

私の前に飛び込んできた建物、私が姉さんと過ごした大切な場所……
大切な場所でありもう戻れない場所……

「……行きましょう、ここにずっといるわけには行きません。」

歩きだした私の前に二人の男女が近づいてきました。
女の子のほうは15、6歳でしょうか、男性のほうは私よりも年上
ですね。

「いやあ、いい揉みっぷりだったよあのお姉さん。」

「まあやりすぎて犯罪するなよ。」

「しないよ、でもほんとにいい揉みっぷ」………」

うん？女の子と目が逢いましたね。
なんでしょうか……獲物を見つけたような笑いです……。

気にしてもしょうがないですね、行きましょう。

歩いて通り過ぎようとしたところ女の子が前に出てきました。

「お姉さん……強いね。」

「え？」

「強い……悔しいけど、シャーリイよりずっと強い。」

いきなり強いといわれても……この場合なんて答えればいいのか。
よう。

まあ思ったことを言いましょうか。

「あなたのほうも相当な腕前ですね、正面に立ってみて改めて伝わってきますよ。あなたの力が。」

この言葉は嘘ではありません、私には及ばないでしょうが。
それでも彼女の实力は相当なものであるというのはわかります。

「なんかお姉さんに言われるとうれしく感じちゃうなあ。」

年相応の笑顔…というのでしょうか。
雰囲気わかりますが、この子はきっと幼い頃から戦場に立っていたでしょう。

私がいろいろ考えてる時に彼女が聞いてきました。

「お姉さん名前は？シャーリイはシャーリイ・オルランド。」

「私はリリスです、よろしく願いしますね、シャーリイさん。」

「シャーリイでいいよ、その代りリリスのこともリリスって呼んでいいかな？」

「構いませんよ、では改めてよろしく願いします、シャーリイ。」

「うん、よろしくリリス。」

可愛い子ですね、できればこの子とは戦いたくはないものです。

そこに後ろで控えていた男性が声をかけてきました。

「おい、仲良くなつてるとこ悪いがそろそろ行くぞ。」

「あ、うんわかったよ。それじゃ〜ね〜リリース、また会おうよ。」

「はい、縁があればまた。」

そういつて私たちはすれ違います。
そのとき確かに聞こえました……

……次は思いつきり殺り合おう……と。

「ふむ、さすがは噂の“血染めのシャーリイ”ですか…。」

彼女がクロスベルにいるということは、すでに父親のほうもクロスベル入りしている可能性が高そうですね。

「これは赤い星座のこともヨルグさんに聞くことにしますか。」

おそらく赤い星座については知らないと思いますけど…。
さて行きましようか、ここを進んで住宅街を抜ければマインツ参道ですね。

リリース

side
end

3話「赤い星座との邂逅」(後書き)

リリス視点は主にゲームでロイド達が主要人物と出会った後と前でロイド達とはかぶらないようにしたいと思います。

場面によっては会うこともあります。主要戦闘くらいですね。アリオスと戦わせてみたいです・w・

それではまた。

4話「マインツ山道の人形工房 前編」

リリース side

みなさんこんにちわリリースです。

今私はマインツ山道の分岐点、つまりバス停にいます。
え？早すぎるって？歩いて行くわけじゃないじゃないですか、バスって
いう立派なものがあるのに歩いて行く道理がありません。

「さて、左はマインツトンネル道なので右ですね、人形工房は。」

どうせなら人形工房前までバスも運行してくれると楽なのですが…
…そんな贅沢も言ってもらえないですね。

「はあ、登りましょうか……。」

私はあたりを見回しながら進んでいきます。

「この辺はあの頃とあまり変わっていませんね、まあ来る人があまり
いないっていうのも理由の1つでしょうが。」

そうですね、ここに来る人はあまりいません。

用があるといえばヨルグさんに人形を作ってもらいたいひとが頼みに来るかアルカンシエルで使う機材や人形器具などを調達するくらいですか。

そういえば少し前にレンが訪れたそうですね。

久しぶりにお話したかったのですが……あの子はやっと家族というものを手に入れたんです。

今は素直に喜ぶとしましょうか。

連絡を取ろうと思えばいつでも取れますしね。

カサカサ……

「うん？」

先ほどからなにか心配がするとは思いましたが案の定魔獣でしたか……。
それに……けっこう大きいですね、こんなものが参道には通る人の迷惑になりかねません。

しょうがないですね、倒すとしm！？
ドン！ドン！

「増援……7体沸いたということは。」

全部で8体……しかし、私の敵ではありません。
腰にさした刀を抜き私はクラフトを発動する。

「一の舞、夜桜」

リリスは一瞬で魔獣達の背後に回り強力な一閃を放つ。

ーシューーー

音はわずか、しかしその威力は受けた者の命を刈り取るには十分だった。

「痛みはありません、斬られたとわかった時はすでに……。」

ボタン！ ボタン！

「命潰えた後でしょうから。」

あれ、命潰えた後では斬られたとわかりませんね……気にしないで
進みましょう……。

「さて、もうすぐ工房ですね、日が暮れるまでにはクロスベルに戻りたいですし急ぎましょうか。」

余談ですが、リリスが倒したこの魔獣がクロスベル警察特務支援課に手配魔獣討伐依頼として来ていたことを知るのは後のことになる。

「ふう、着きましたね。」

相変わらずここは変わっていませんね。
まあヨルグさんらしいといえらしいのですけれど。

「さて入るとしましょうか。」

門に手をかけようとしたときに声が聞こえました。

「すこし待っておれ、人形に案内をさせよう。」

すると扉が開き小さなアンティークドールが出てきました。

「私が来たことはお見通しですか……どこでわかったのでしょうか。」

人形についていくと部屋に入りました、ここも変わっていませんね。
部屋の中には一人の老人がいました。

「まあいろいろ聞きたいことはあるが、まずは久しぶりと言ってお
こうかの。」

「そうですね……お久しぶりです、ヨルグさん。」

なにを聞かれるかわかりませんが今はこの再開を喜ぶとしましょう。

リリース side end

5話「マインツ山道の人形工房 後編」

リリース side

みなさんこんにちわリリースです。

今私は人形工房でヨルグさんとの久しぶりのお話しに花を咲かせています。

「ふむ、そうか。アリアンロードに修行をの。」

「はい、アリアさんにはほんとにお世話になりました。」

「アリアさんか、あの者を愛称で呼ぶのはお前くらいのものだな。」

「ううゝ、いけなかったでしょうか……アリアンロードさんと長くて大変なんですよ。」

「まあよいだろう、あの者は使徒の中でも卓越した力をもつやつだ。故に対等に話しかけてくる者もありおらんかったのかもしれない。その点でならお前のことはさぞ気に入ってるのやもしれんな。」

「ふふ、そう言ってくれるとうれしいですね。」

できれば本人の口からききたい言葉ですけれど。」

もし言われてしまうと私はあまりのうれしさに飛び跳ねてしまうかもしれません。あの人は私の憧れなのですから……あ！もちろん1番の憧れは姉さんですよ、こればかりは譲れません。……姉さん

……

私が若干俯いているとヨルグさんが声をかけてきました。

「ふむ、その様子だとお前の姉には会ってないのだな。」

「！？……いけませんね私は、姉さんのことを考えるとすぐ顔に出てしまいます。」

ヨルグさんは鋭いですね、思えば昔から私の思いの内を察して話してくれていましたね。その心遣いに私はどれだけ救われたでしょうか。

「まああの姉のことだ、どんな過去を持っていようがお前のことを受け入れてくれると僕は思うがな。」

「……そうですね、おそらく今会いに行ってもあの人は私を思いつきり抱きしめてくれて……ただ一言、おかえりと言ってくれと思う

います。ですが……私は……。」

そうです、姉さんはとてもやさしいですから。
でも……だからこそ私は……

「……教団での出来事が引きずっておるのか。」

「……はい……。」

「教団はもうおらん、ヨアヒムもすでに死んでおる。
お前を縛るものはなにもないはずだがな。」

「そうですね、でもやはり忘れられないんです。自分が生きるため
とはいえ……私を受け入れてくれた人達をこの手にかけたことが
……。」

あれは今でも忘れられません。

何日にも続いていた薬物投与と脳をいじられていた生活に私は心を
壊しそうになっていた。

そして私は奴らの一言に心を許してしまった。

――お前が今もつとも親しくしている者を殺せばここから出してや
る――

その瞬間、私の中で何かが弾けた。

グサツ！ズブ！グシュ！

「アハハハ、これでコレデ私は自由にナレル。」

ズブ！グサツ！

四肢を切り落とし、内臓を抉り出し、人間の原型が留めてないほどに私はその友人を壊しつくした。

まるで………相手を壊すことを楽しむかのように………。

気づけば私は涙を流していました。

「私は……またあの時の感覚が蘇ってくるのが怖いんです！！あの人を壊すことを楽しんでるような自分が！！もしかしたら姉さんにも同じことをしてしまうかもしれないって！！。」

「それが……お前を大切なものから遠ざけている理由か………。」

「……はい。」

「ふむ……しかし儂のいうことは変わらん。」

「えっ？」

「それでもやはり、お前の姉はお前を傍に置いとくと思うぞ儂は。」

「ふふ、そう……でしょうね、それが……姉さんですものね。」

ふふ、なぜか不思議と気持ちが軽くなりましたね。
ヨルグさんには感謝しないといけません。

「今すぐとは言わん、近いうちに会いに行ってみるといい。
それがお前ら姉妹のためにもなる。」

「そうですね、今すぐはまだ心の整理がつかないのでなんとも言えませんが、近いうちに必ず会いに行きます。」

今の私はどんな顔をしているのでしょうか。
ただ……これだけは言えます、私はもう……泣いていないって。

「ふふ、ありがとございます、ヨルグさん。」

「礼などいらん……それよりこれからどうするんだ？外はすでに暗いが。」

「えっ。」

ふと時計を見ると……ほんとにもう夜ですね……。
もうおそらくバスは動いてないでしょうし……困りました。

「その様子だと帰る手段が思いつかないといったところか。」

「うっ……わかりますか。」

うっ／＼／＼恥ずかしいです。

ちよつと挨拶してお暇する予定でしたのに話し込みすぎました……。

「ふむ、なら今日は泊まっていくといい。」

「え？よろしいのですか？？迷惑なのでは……。」

「ふ、今さら遠慮する必要もあるまい。」

そうですね、この際お言葉に甘えさせていただきましょか。

「わかりました、今日1日お世話になりますね、ヨルグさん。」

ヨルグさんにはほんとに感謝してもしきれませんね。
あ！　そうです。

「ヨルグさん、今日の夕食は私に作らせてください。」

「そうだな、久しぶりにお前の料理を食べさせてもらおうかの。」

「はい!!」

今日は腕によりをかけて作らせていただきます。
覚悟してくださいね、ヨルグさん。

～夕食時～

「ふむ、ほんとにお前は料理がうまいな、久しぶりに食べたがあの頃より腕が上がっているようだ。」

「ふふ、ありがとうございます。」

やはり自分の作ったものを褒められるのはすごくうれしいですね。がんばって作った甲斐がありました。

さてと、それではそろそろ聞きたいことを聞くことにしましょうか。

「ヨルグさん、2つほど聞きたいことがあるのですがよろしいですか？」

「なんだ？ 儂に答えられる範囲でなら答えよう。」

「ありがとうございます、まず一つ目ですけど、身喰らう蛇は此度の計画にどれほどの戦力を回してくるのかを教えてほしいのです。」

「ふむ、幻焰計画か、一つ言えることはリベールのように本格的に介入してこないことだな。お前が知っている通りアリアンロードともう二人……“第六柱”と“道化師”が来ると聞いておる。」

「第6柱と道化師……博士とカンパネルラさんですか。」

アリアさんだけでも厄介ですけどその二人も十分厄介ですね。
博士が来るということはゴルディアス級が出てくる可能性が高いです。

カンパネルラさんは神出鬼没ですし対処の仕様がないですよ……。

「まあどいつも厄介なことに変わりはない。」

「そうですね、いずれ見えるでしょうしその時ですね。」

「まあ明日第6柱と道化師が訪ねてくると言っていたが。」

「そうですね？　なんでまた……。」

「なんでもゴルディアス級の最終型がどうか言っておった。
大方自慢もあるだろうがな、まったく忌々しい。」

「あはは、相変わらず仲悪そうですね。」

「当たり前だ、あんなのとは顔も合わせたくはない。」

これは相当ですね……お二人の間に何があったのでしょうか。
気になります。聞かないでおきましょう。

「ヨルグさん、その二人が来たときは私も挨拶していいですか？」

「ふむ、まあいいだろう。奴らにとってもたいして気にはせんだろうしな。」

「ふふ、ありがとうございます。」

さて、明日が楽しみです。ね、敵として見えるとはいえ知り合いですから。

「ではもう一つ、赤い星座について何か知ってることはないですか？」

「ふむ、ゼムリア大陸最強の獵兵团か。
クロスベル入りしたということはわかってはおるが詳しいことはわからんな。」

「そうですか、わかりました。」

「力になれんですまないな。」

「いえ、そんなことはありません。
身喰らう蛇の情報だけでも十分すぎるくらいですから。」

「ふ、そうか。」

さて、聞くことも聞きましたしそろそろ休みましょうか。

「それではヨルグさん、私はそろそろ寝ようと思います。」

「わかった、人形に部屋へ案内させよう。」

「わかりました、それではヨルグさんおやすみなさい。」

「うむ、ゆっくり休むといい。」

「はい。」

こうして人形工房での1日が過ぎていきました。

リリース side end

6話「蛇の使徒と執行者」

リリス s i d e

「ここはどこでしょうか、真っ暗です……。」

私は今何も見えない真っ暗な空間にいます。

たしかに昨日人形工房で寝たはずなのですが……

ということは考えられるとするならば……

「夢……なのでしょうか。」

ここ最近夢というものを見ていなかったのになんか変な感じですね。
そんなふうに私が思っていると目の前に映像が広がってきました。

「これは……昔の私と……姉さん？」

そこには、私が姉さんに拾われて2月ほど経ったときの映像が流れていました。

・
・

・
・
「次はこの服を着てみなさい、リリース。」

「すこし派手じゃないでしょうか、私には似合いませんよ。」

「いゝや、絶対似合うわ。私が保障するから！」

「うう、わかりました。着てみます。」

懐かしいですね、あの頃の私はあまりオシャレというものをしていませんでしたからよく姉さんに言われていました。オシャレってきれいな人がするものでは？と姉さんに言ったら「ならリリースもしないとダメじゃない」と言われましたっけ。私は自分の容姿が優れているとは思えないのでその言葉の意味が当時はわかりませんでしたね。

「着てみました。」

「やっぱり私が言った通りね！すごい似合ってるわよリリース。」

「／／／そうでしょうか、自分ではよくわかりません。」

「リリースは自分の容姿に自信を持ったほうがいいわよ、振り向かない男はそうそういないと思うわ。」

「別に男の方に振り向いてもらわなくても……姉さんにさえ見てもらえれば……。」

「え？最後のほう聞こえなかったんだけどなんて言ったの？」

「／／／なにも言ってますん！」

「えゝ、絶対なにか言ってたわよ、いいからお姉さんに言ってみなさい！」

「だからなにも言っていないって言ってるじゃないですか！」

ふふ、懐かしいです。

あの後ずっとなにを言ってたのか聞かれましたね、結局言いませんけど……

もし、もし許されるなら……あの頃の生活に戻りたいですね……姉さんとまた一緒に……

ペペペペペペペペペペ！

「うつ！？」

そうでした、目覚ましをかけていましたね。
いいところだったので怒ればいいのか、気持ちに沈んだ所でちょうどよかったと喜ばいいのかわかりませんね……

「ヨルグさんは……………」

ヨルグさんはいませんね、そういえば今日は博士とカンパネルラさんが来ると言っていました。

「ということとはもうすでに？」

行ってみましょうか、お二人に会うのはほんとに久しぶりです。
どういう反応されるのでしょうか…………

私は扉を開けて外を見てみると思ったとおり、ヨルグさんとお二人がいました。

「博士、僕たちは喧嘩をしに来たんじゃないんだからもうすこし穏便……………あれ？」

「ん？どうしたカンパネルラ……………おや？」

お二人とも気づいたようですね、黙っているのもなんですし挨拶しましょうか。

「お久しぶりですね、博士にカンパネルラさん。」

「リリースじゃないか！久しぶりだね、まさかクロスベルにいたとは思わなかったよ。」

「たしかにな、なにかクロスベルに用でもあったのか？」

上からカンパネルラさんに博士が聞きます。

「これからクロスベルでなにかが起きるかもしれないのを黙って見ていることなんかできないということですよ、お二人とも。」

「そうか、たしかクロスベルにはお前の姉がいたな。」

「はい。」

「そっか、でも……どんな理由があっても僕たちは手を引かないよ?。」

そんなことわかっていきますよ、私自身そんなことはありえないと思っていますし。

「わかってますよ、すべては大いなる 盟主 のために。ですよね。」

「ウフフ、わかってるじゃない。」

「だからこそ私も手を引くことはできません、クロスベルを……姉さんを守るためなら……たとえどんなにあなた方が強大であったとしても刀を向けさせていただきます!。」

「ふふ、いいのかい? そうなるとあの人も戦うことになるよ?。」

「……覚悟はできていますよ。」

「そうか、まあ僕たちの計画にとって君は大きな壁になりそうだしあの人には勝ってもらいたいけどね。」

「そう簡単には負けてあげませんよ？といってもたとえあの人相手で負けてあげるつもりはありません。」

「そうです、たとえ相手がどんなに強くても負けるわけには行きません。」

「まあ僕たちよりも赤い星座を気にしたほうがいいと思うよ、彼らは獣みたいなものだからね。」

「そうですね、もちろんそちらのことも考えています。」

「ふふ、精々ががんばりなよ。陰ながら応援くらいはしてあげるからさ。」

「応援するくらいならこちらの力になってほしいものですけどね…。」

まったくそのとおりですよ、私一人ではいくらなんでも限界がありますからね。

「ふふ、それは無理さ。っと博士は……。」

そういえば博士のことを忘れていましたね、すっかりカンパネルラさんと話し込んでしまいました。

「だから調整を頼みたいのだよ。」

「自分でやったらどうだ、僕はお前にはあまり関わりたくない跟前にも言っただけだ。」

……ヨルグさんだけ博士のこと嫌いなんですか。

「あの、カンパネルラさん？」

「ん？なんだいリリース。」

「あの二人はなぜあんなに仲が悪いのですか？」

「さあ？僕もあまり詳しいことはわからないんだよ、いつも会って喧嘩ばかりしてるからなにかあったんだろうとは思ってるんだけどね。」

「そうですか……うん？」

向こうから誰か着ますね、あれは……

「……特務支援課……ですか。」

リリース side end

7話「再会」

リリス s i d e

あちらから来るのは特務支援課ですね。

あの人たちは身喰らう蛇について知っているのでしょうか……レンと関わっているのであれば組織の事くらいは聞いているかもしれないですね。

人物までは知らないでしょうが。

それにしても……ヨルグさんと博士の話し終わりませんね……

「くどい。おぬしを入れるつもりはない。

いかに 十三工房 の統括者とはいえ、立ち入る権利はないはずだ。

」

「……フフ、まあいいだろう。

アレはN o . X V の所有物、元より取り上げるつもりはないさ。」

N o . X V ……レンの所有物ですか、まああれをあの子から取り上げるというのであれば私はあの子の味方をしますよ……博士？

「っ！？、し、しかしマイスター？データは一通り渡してもらったよ

「？」

あ、ちょっと殺気を出してしまいました。博士が動揺しています……
カンパネルラさんがちょっと笑っていますね、うん？口パクでなにか言っています……

“あの子がかわいいのはわかるけど過保護すぎじゃない？”ですか
……

……余計なお世話ですよ？少しO H A N A S Iをしてほしいのでしょうかね、カンパネルラさんは。」

「！？」

あ、カンパネルラさんが震えています、どうしたんでしょうか……

「（今リリースの声でO H A N A S Iというワードが聞こえた気がするよ……うん、余計なことは考えないようにしよう。僕はまだ死にたくはないからね……）」

なんかカンパネルラさんが一人で頷いています、ほんとにどうしたのでしょうか。

っと、まだ話しは……終わっていませんね、……長いです。

「それが“あの方”の御意志でもあるのだからねえ。」

「……フン、おぬしに言われるまでもない。」

本当に仲が悪いですね、今度なにがあったか本気で聞いてみましょうか。

「ウッフ、本当に仲が悪いなあ。」

そこに今まで話さなかったカンパネルラさんが口を開きました。

「博士も嫌われていると判ってわざわざ訪ねなきゃいいのに。」

その通りですね、私なら絶対嫌われている相手の元には姿を現そうとは思いません。

「ハハ、何を言ってるのかね？私とマイスターは旧知の仲。

特に人形作りに関しては固い師弟の絆で結ばれているんだからねえ。

」

……師弟の絆ですか、とてもそんなふうには見えません。

「フン、戯言は止めるがいい。

所詮儂の技術など結社にしてみれば古臭いもの。

おぬしの 統合理論 があれば儂に頼る必要などあるまい？」

統合理論……聞いたことありませんね、まあ私も結社についてそこまで詳しく知っているわけではないですから仕方ありませんけど。

「フフ、ご謙遜を。

こと人形の調整にかけてマイスターの右に出る人間なんでこの世に存在しないさ。」

そうですね、私もそれは思います。人形作りでヨルグさんに勝る人などいないでしょう。

「あ、でも パテルⅡマテル に付けたあの回路だけはただけないねえ？あれじゃあ、せつかくの 殲滅天使 のポテンシャルが無駄になってしまうじゃないか。」

っ！？この人は！！

「……この外道が。」

私も口を出そうとしたとき来訪者が来ました。やっと来たんですか、特務支援課…………

「えっと、すみません。」

「おや…………？」

「あれ？お客さんみたいだね。」

お二人も気づいたのか話しが終わりましたね。

「…………カンパネルラ、用件は済んだだろう。
その不快な男を連れてとっと立ち去るがいい。」

不快って…………まあわたしもさっきの会話を聞いているうちにそんなふうになってしまいました。

「ウフフ、了解。」

ほらほら博士、さっさと次に行かないと。
今日中に用を済ませてラボに戻るんだろ？」

「フフ、もちろんだとも。」

それではマイスター、これで失礼されてもらうよ。
例の子たちも完成しだい、チェックをお願いするからね?」

「……………くどい!とつと失せるがいい!」

ああ、ヨルグさんついに怒ってしまいましたね、これはとうぶん機嫌が悪いかもしれませぬね。

「ウフフ、それじゃあまた、リリースもまたね。」

「はい、またお会いしましょう。」

また……………ですか、きっと次会うときは戦う時ですね……………

お二人が去っていきます、ていうか特務支援課のみなさんボーっとしていますね。

そりゃそうでしょうね、いきなりこんな場面に出くわせば誰だってこうなりますかね。

「……………何を呆けている。」

4人が慌てて来ます。

「す、すみません。」

「その節はどうも……ご無沙汰していました。」

上から前にも言いましたが年上に好かれそうな男性と灰色の髪でお客様のような女性が言います。

「特務支援課か、久しいな。」

私もあいさつしておきましょうかね、黙って立ち去るなんてできないですし。

「ふふ、またお会いしましたね、みなさん。」

「君はあの時の……」

「知り合いだったのか？ リリス。」

「いえ、知り合いというほどのものでもありません、昨日すこし話したくらいですよ。」

「ふむ、そうか……」

ヨルグさんがすこし考える仕草をしたあと彼らに向き直ります。

「レンはリベールへ去った、今さらここに何の用だ？」

やっぱり機嫌悪いですね、ヨルグさん。

「いえ、近くに来たので挨拶に伺っただけなんですよ。」

「その……来客中に失礼しました。」

「フン、招かれざる客だ。その辺は気にしておらん。」

招かれざる客ですか、博士からすればたしかにそうでしょうね。
私としては久しぶりに会えるということであれしさはありましたが

……

「だが今は特に話すこともあるまい。」

そう言つてヨルグさんは工房の方を向き

「何か用件ができたなら改めて訪ねてくるがいい、レンに免じて話くらいは聞いてやろう。」

なんだかんだで話を聞いてくれるのがヨルグさんのいいところですね。

「あ……」

どうやら彼には予想外の返答だったようです。

「リリースも何か困ったことがあればいつでも来るといい、儂にできることなら力になろう。」

ふふ、やっぱりやさしいですね。ヨルグさんは。

「はい、その時はぜひ力を貸してもらいます。それではまた会いましょう、ヨルグさん。」

「フ、またな。」

ヨルグさんの門の内側に入ると門が勝手にしまりました、どこかにセンサーでもあるのでしょうか。

「か、勝手に門が閉まった……」

やっぱり驚いていますね、この反応だと彼女がここに来たのは初めてでしょうか。

「ふうん、古めかしいけど何か仕掛けでもあるのかな。」

もう一人の彼もそうは言いますがあまり驚いてはいませんね。

「ああ……とんでもないカラクリを作っている場所だからな。それに……さっきの来客も気になるな。」

気になる……ですか、この人……きっと警察官としての感は相当な物なんでしょうね。

「ええ、招かれざる客って言ってたけど……何ていうか、その……」

怪しげな感じだったわね。」

ふふ、怪しげですか、博士はともかくカンパネルラさんは怪しさ満点ですね。

「そうですね……まあ危険そうには見えませんでしたけど。」

危険そうには見えませんか……今は……ですよ？

「（……フフ、危険そうには見えないか。）」

彼はなにか知っていますね、それに……彼はなにか隠している気がします、その何かはわかりませんが他の人たちも知らないことでしょうねきっと。

「そうだ！まさか君がここにいるとは思わなかったよ。」

「本当ね、なにか知り合いだったみたいだけど」

ふと気づいたように彼らが聞いてきました。

「そうですね、簡単に言えばヨルグさんには昔に助けていただいたことがあるんです。私にしてみれば恩人なのですよ。」

「そうだったのか、それにしても君の言った通りだったな。」

「うん？何がですか？」

はて……私は彼らに何か言ったのでしょうか。

「昨日会ったとき、“また近いうちに会えそうだ”って言ってただろ？」

「ああ、そういえば言いましたね。
まさかそれが1日後の今日だとは思いませんでした。」

「ふふ、そうね。
ちよつと挨拶にきただけなのにあなたに会えるなんて思っても見なかったもの。」

「そうですね、それはわたしですよ。」

たしかにこんなにはやい再会は私自身予想外でした。

「そういえば俺たち、なんだかんだで君の名前聞いてなかったな。」

そういえばそうでした、キアを保護していることしか私自身彼らのことを知りませんね。

「ああ、そうですね。それでは自己紹介でもしましょうか。こうして再び会えたのも何かの縁でしょうし。」

「そうだな、俺はロイド・バニングス。よろしくな。」

「エリイ・マクダエルよ、よろしくね。」

「ノエル・シーカーです、よろしくお願いします。」

「ワジ・ヘミスフィアさ、今後ともよろしく頼むよ。」

「はい。私の名前はリリスです、みなさんよろしくお願いしますね。」

思わぬ所で彼らと知り合いになってしまいました。

……ですが……なんでしょうかこの違和感は……まるで彼らと知り合うことが決められてしまったような感覚です。
まさか、私がクロスベルに着いたときにキーアを助けて彼らと知り合うというのも決められたこと？

私がクロスベルに行く日に見た夢で聞こえた少女の声が気になります……うゝん、考えても仕方ありません。いずれわかることでしょう。

リリス s i d e e n d

??「悪夢」

月が輝く中、アルモリカ古道の先、古戦場で対峙する二つの影があった。

「はあ……はあ……はあ……」

「うう……はあ……すう……」

お互い長い間戦っていたのか息が絶え絶えになりながら片方の人影が言葉を発する。

「どうして……どうして姉さんを守れなかったの！あなたはずっと姉さんの傍にいたのでしょうか！？」

「っ！？わたしは……」

「あなたが姉さんのことを大切にしてくれてるって思ったから！！私はあなたに姉さんを守ってくれるように頼んだの！！姉さんのために……暗殺者の道を捨ててくれたあなたに！！」

「……わたし……し……は……」

大切な存在を失い、憎悪を宿らせた瞳の少女。

大切な存在を失い、悲しみと絶望を宿らせた瞳の少女。

二人はともに大切な存在を目の前で奪われた。

元々彼女たちは互いに親友ともいえるべき存在だった。

二人は暗闇の道を歩き続けてきた。

そんな道を歩む中、一人の女性の手によって二人は光を手にするこ
とができた。

だが、運命は無情にも二人の元から光を奪い去った。

女神が誤った道を指し示すかのように二人はその道を進み、そして

……

「私は……あなたをゆるさない!!」

「くっ！？」

お互いが激しい斬撃を繰り出す。

しかし、その戦いもすぐに決着は着いた。

ズブッ！！

「……………あ……………あ……………」

黒い短めの髪の少女の剣は青紫の髪の少女の心臓を貫いた。

グサッ！！

「……………う……………うあ……………」

そして青紫の髪の少女もまた、黒い短めの髪の少女の心臓を貫いていた。

大切なものを失い、殺し合いをした世界。

これも一つの未来だったのだろう。

幼き少女は思う、そんな世界はあまりにも悲しすぎると。

だから幼き少女は力を振う、よりよい未来を築き上げるために。

……叶わぬならば……すべてを“零”に……

8話「新しい絆」

人形工房から山道を下る影が5つ。

クロスベル警察特務支援課と我らが主人公リリスである。

「へえ、8年ぶりにクロスベルに帰ってきたのか。」

特務支援課リーダーのロイドが言う。

「はい、久しぶりに帰ってきたのですがあまり変わっていないくてホッとしましたよ。」

このリリスの気持ちは本当である。

大好きな姉と共に育った町があまりに変わりすぎているかもしれない、これがリリスにとっては心配だった。

だがそれも杞憂だった、彼女にとって一番安心できたのは何よりアルカンシエルであろう。

クロスベルの中でも特に大切な場所、彼女が本当の自分を見つけることができた場所なのだから。

「ねえ、リリスさんは今までどこにいたのかしら？」

特務支援課メンバーの一人、エリイが聞く。

「そうですね、私は今まで各地を転々としていたんですよ。だからどこかにの町に住んでいた、ということはありませぬね。」

「そうなの……その年で各地を回るっていろいろと大変なこともあったのではないの？」

エリイの疑問も当然である、リリスの年は１７歳。

自分と変わらないくらいに年なのだ、エリイ自身も大陸を回ったことはある。

しかしそれは自分の叔父であるマクダエル議長と共に回っていたからだ、決して一人でいたわけではない。

「そうですね……たしかに大変なことも多々ありました。ですが私は……過去の自分を許すことができなくて旅に出たんです、家族を捨てて……」

リリスの顔が悲しみに染まる。

最愛の姉と離れること、それは彼女にとって何事にも代え難いほどの悲しみを伴う選択だったのであろう。

「えっと……ごめんなさい、なにか嫌なことでも思い出させてしま

「たかしら……」

「いえ、かまいませんよ。

この道を選択したのは私です、後悔はしていない………といえは嘘になっ
てしまいますけど………」

リリスは笑う、だが周りの4人はそれが強がりの笑顔というのがわ
かってしまった。

「えっと、私には妹がいるんですけど………リリスさんの家族はどう
いった方だったんですか？」

警備隊からこのたび特務支援課に異動してきたノエルが言う。

「家族ですか………先ほど言った家族というのは本当の家族ではない
んです、私は本当の自分の家族がどういった人なのか、顔も知りま
せんから………」

またもや暗い話題になってしまった、ロイドとエリィがジト目でノ
エルを見る。

「え………えっと………本当にすみません!!」

「ふふ、構いませんよ。」

私は確かに本当の家族を知りません、ですが私は今の家族に家族以上の愛情をもらいました。

ですから私は幸せなんですよ、決して悲しくはありません。」

「そうですか……」

4人は思う、なぜ彼女はこんなにも強いのかと。

だからこそ4人は聞きたいと思った、家族がいない彼女をこんなに幸せに満ちた顔をさせた今の家族がどういった人たちなのかを。

しかし聞きづらかった、さつき彼女はその家族を捨てたと言ったのだから。

「ふふ、私の今の家族がどういった人なのか知りたい……そんな顔ですね。」

「? ! ?」

4人は驚く、それもそのはず。

思っていたことをこうも簡単に言い当てられたのだから。

「そうですね、別に隠さないといいなことでもないですし話すのは構いません……聞きたいですか？」

「……いいのかい？聞いても。」

わけあつて特務支援課にきたワジが聞く。

「構いませんよ、私自身……なぜかわかりませんがあなたがあなたたちのことは嫌いではないです、むしろ好意的です。本当になぜかはわかりませんが。」

リリスは本当になぜかわからないというふうに笑いながら言う。

4人は嬉しかった、好意的に見ているというのは誰に言われても嬉しいだろう。

リリスに受け入れてもらえた、それが4人にとってはすごく嬉しかった理由なのかもしれない。

「じゃあ聞かせてもらえるかな、君の家族のことを。」

「はい、私には……姉がいました。」

リリスは当時を思い出すように話し出す、その顔は本当に大切な人を想うやさしい顔をしていたと後に特務支援課のメンバーは語ったという。

「姉は……一言でいうなら“太陽”のような人……でしょうか。」

「太陽？」

「はい、姉は見る人すべてを魅了するかのような人でした。」

「すごいお姉さんのね、ふふ……リリスさん本当に楽しそうに話すから。」

「はい！本当にすごい姉さんだったんですよ。」

4人は内心驚いていた、リリスは一言でいうなら俗に言う“クールビューティー”な感じであろう。
そんな彼女が目を輝かせながら姉をすごいと言っているのだから。

リリスの話は続く。

「姉さんは私に光をくれたんです、暗闇の道を歩いた……生きる意味を見いだせなかった私に。」

「本当にリリスはお姉さんのことが好きなんだな……でも……でも

どうして君は……そのお姉さんの傍を離れたんだ？」

ロイドが聞く、それはほかの3人も思ったこと。

「……すみません、それは私が姉さんに拾われる前のことが関係しているのですが……それはまだ話せません……ごめんなさい。」

「いや……構わないよ、ありがとう。話してくれて。」

「本当にいい話だったわ、あなたのお姉さんに会ってみたいわね。」

「はい、一度妹のことについてお話ししてみたいですね。」

「フフ、久しぶりにいい話を聞いた気がするよ、ぜひ僕もその姉に会ってみたいね。」

上からロイド、エリィ、ノエル、ワジが言う。

「ふふ、もしかしたら会えるかもしれませんよ？姉さんは今クロスベルにいるので。」

「そうなのか!？」

「はい……私自身今すぐにも会いたいのですが……まだ心の整理というものができていなくて……」

そう、リリースは今すぐにも姉に会いたい、姉の胸に飛び込みたい
と思っている。

しかし過去の自分の記憶がそれを邪魔してしまう。

「そうか……でも早いうちに会った方がいいと思う、俺はそう思う
よ。」

「ふふ、ありがとうロイドさん、それにみなさんも。
みなさんと話すうちに私自身心が軽くなった気がします。」

「ふふ、私たちもリリースさんの力になれてよかったわ。」

「本当です、もし困ったことがあればいつでも言うてください。」

「そうだね、その時はぜひ力にならせてもらっよ。」

「みなさん………本当にありがとうございます。」

リリースは嬉しかった、自分の身の上の話はすべて聞かせたわけではないが、自分を受け入れてくれた特務支援課が温かい場所だと感じた。

「よし！そろそろバス停だな、リリースはどうするんだ？」

「そうですね、私はバスでそのままクロスベルに戻ろうと思います。みなさんとはバス停までですね………私自身もうすこしみなさんと話したいと思っていたのですこし残念です。」

リリースはシュンとした、リリースは気づかなかった。

数人が顔を赤くしていたことに。

「と、とりあえず進みましょう。」

私たちも早くメインツに向かわないといけないし／＼／＼。」

「そ、そうですね。」

時間は限られていますから急ぎましょう／＼／＼。」

「フフ、そうだね。」

リーダー、先に進もうか。」

「そうだな……つと、どうしたんだ二人とも、なんか顔が赤いよう
だけど。」

「な／＼！？なんでもありません／＼！」

「そ、そうか……。」

「ふふ、行きましようかみなさん。」

リリスは新しい絆を手に入れた。
この絆が後に奇跡を生むことになるのを今はまだ、誰も知らない。

8話「新しい絆」（後書き）

二つ名決まりました！！

設定に付け加えました。

9 話「リリスの力」

エリイ s i d e

みんなこんにちわエリイよ。

私たちは今リリスちゃんと一緒にバス亭に向かっているところよ。

「それにしても……さっきのリリスさんのシュンとした姿……可愛かったですね。」

隣を歩いていたノエルがそう言ってきたわ。

「そうね、たしかにあの時のリリスちゃんは可愛かったわ……思わず抱きしめちゃいそうになったもの。」

私は前を歩いているリリスちゃんを見ながら言う、クールな感じはするけれど時折見せる年相応の子供らしさが一層リリスちゃんを可愛く見せてしまうのかしらね……

「あはは……それは私もです、フランとはまた違った可愛らしさですよ。」

「ふふ、ノエルさんはフランちゃんのことになると人が変わるものね。」

いつだったかしら…… フランちゃんにお礼をしたいって人がいて、その時にフランちゃんが好きながいるって言った時のノエルさんすごく慌てていたものね。」

「あ／＼あれは姉としてすこし気になっただけです!!」

もう、ノエルさんったらこんなに慌てちゃって。

まああの時は私たちもすこしだけびっくりしていたのだけどね。

「おゝいエリィゝ!、ノエルゝ!どうしたんだゝ?」

あら、いつの間にかロイドたちと離れていたのね。

「ノエルさんいきましよう、離されてしまっていたわ。」

「あ、本当ですね、行きましょ。」

「ええ、いきましようか…… ふふふ。」

「もゝ／＼エリィさん忘れてください!!」

「ふふ、ごめんなさいね。」

慌てるノエルさんが少し可愛いと思ってしまったのは内緒よ。

エリイ s i d e e n d

リリス s i d e

すこし遅れてしまっていたエリイさんとノエルさんが追いつきました。

なぜかノエルさんの顔が赤い気がするのには気のせいでしょうか……

「二人ともどうしたんだ？何かあったのか？」

「すこしノエルさんと話し込んでしまったのよ、ごめんなさいね、心配させたかしら。」

「いや、なにかあったのか思ったただけだから、謝る必要はないよ。」

なにもなかったようで安心しました。

……それにしても近いですね、それも……けっこうな数です。

「みなさん気をつけてください、魔獣です。」

「気づいていたんだね、けっこうな数……かな。」

ワジさんも気づいていたようですね。

「はい、多いですね。……来ました!」

「!これは……」

「多いわね……」

「でも……やるしかありませんね。」

「そうだな、リリスは下がっていてくれ。」

「そうね、リリスちゃんは下がってて。」

えっと……私も戦えるのですが……今はお言葉に甘えましょうか。
みなさんがピンチになったら助太刀しましょう。

「わかりました、みなさん気を付けてください。」

「ああ！よし、みんな！一氣にいくぞ！！」

「ええ！」

「はい！」

「了解。」

ロイドさんがみんなを鼓舞します、すごいですね、たった一言でここまでみんなの士気をあげるなんて……

「はあ！！　せい！！！」

「は……　甘いよ。」

前衛はロイドさんとワジさんで魔獣を攻撃していますね、ロイドさんのトンファ―術は大した物ですね、ワジさんの体術もすごいです……

「そこ！！ やあ！！」

「はあ！！ そこです！！」

後衛はエリイさんとノエルさんですね、エリイさんは射撃とアーツを組み合わせた戦いです、アーツの威力もちろんですが射撃の腕も大したものです。
ノエルさんも射撃の腕は負けていませんね、さすがは警備隊期待の人ですね。

「しかし……数が多いですね、向こうの魔物もこっちに気づいたようですね。」

さしずめチェインバトルってやつですね。

「くっ！数が多いな……エリイ！いけるか？」

「ええ、いつでもいいわよ！」

うん？あれは……

「ふん！！はあ！！せい！！」

ロイドさんがまず魔獣の集団に3連撃を打ち込み一歩飛び退きましたね。

「「スターブラスト！！」」

すごいです……敵の集団が半分減りました……ですがまだ来ますね、助太刀しましょうか。

「はあ……はあ……まだいるのか……」

「え……ええ……あと少しなのだけど。」

「これは……すこしきついかもしれませんがね。」

「そのようだね（あれを使うかな……）」

「みなさんあとは私にまかせてください。」

「え？リリスは戦えるのか？」

「はい、私も戦えると言おうとしたのですがみなさんのお言葉に甘えさせていただきました。」

「そ、そうだったの……でもけっこうな数よ？」

「問題ありませんよ、私は大丈夫です。」

そうです、あの程度の数では私の障害にはなりえません。

「行きます……シン！」

「な！？消えた？」

「一体どこに……」

「あ！上です！」

私は瞬動を使い魔獣の群れの上へと移動します、見慣れてない人には私は瞬間移動したように見えるでしょうね。

「三の舞……………雪月花!!」

私は最初に一番力のありそうな魔獣を上空からの一閃で倒します。そして残りは的確に急所を狙い切り伏せます。

「き……………きれい……………」

「あ……………ああ……………踊っているようだ……………」

「何かの舞台を見ている感じが……………」

「そうだね、本当にきれいだよ……………（一本の刀を使い舞を踊るかのような斬撃……………まさかね……………」

みなさんが茫然としていますね、あと一体ですか。

「これで……………ラストです!」

――シュン――

リリスの一閃を受けた魔獣は力なく倒れた。

「ふう、終わりましたね……うん？みなさんどうしたんですか？？」

みなさんがハッと我に返ったようにこちらにきます。

「い……いや、ちょっと目を奪われたっていうか。」

「ええ……戦いとは思えないほどにきれいな戦い方だったわ……」

「はい……舞を踊っているような感じでしたからね。」

「僕もすこし驚いたよ、本当にきれいだった。」

自分の戦い方をきれいと言ってくれたのは彼らで2番目ですね、アリアさんやエンネアさんにも言われました。

「ふふ、ありがとうございますみなさん。」

「それにしてもリリスはすごく強いんだな、驚いたよ。」

「そうね、本当にすごいわリリスちゃん。」

「あまり褒めないでください、私はまだまだです。
私に戦いを教えてくれた人にはまだ及びませんから。」

「リリスさんに戦いを教えてくれた人……ですか、とても強そうです……」

「はい、とても強いです。その人は私の憧れであり目標ですから。」

超えられるかはわかりませんがアリアさんは私の目標です。
どれだけの時間がかかるかはわかりませんがいつかは必ず超えて見
せます！！

「っと話し込んでいたらもうバス停だな。」

「そうですね、みなさんとはここからです。」

「もうすごし話していたかったけど残念ね、また会いましょうね。リリースちゃん。」

「はい、エリイさんもみなさんもまた会いましょう、それではお気を付けて。」

「またね。」

「またな。」

「ぜひまたお会いしましょう。」

「フフ、また。」

そうしてみなさんは動力車に乗ってマインツトンネルのほうへ行きました。

「……みなさん、本当に気を付けてください、なにか嫌な予感がしますから。」

このリリースの予感は見事に当たることになるのは原作を知っている

人ならわかるはず!!

リリース side end

オリ主設定2

リリス・プラティエ

レベル70

†装備†

武器 炎舞の刀（STR+330 RNG+1 戦闘不能20%）
ルシフェリオン（ATS+450 小型の球体、ネックレス
のような形でリリスの首元に付いている、リリスの意思で魔道杖の
ように変化することができる。）

身体 深紅のジャケット（DEF+300 ADF+50 回避率
+20% 女性専用装備）

靴 紅のブーツ（DEF+150 MOV+2 回避率+20%
女性専用装備）

アクセサリー 超・闘魂ベルト（一人の行動が終わるたびにCP増
加）

グラールロケット（全状態以上無効）

†クオーツ†

マスタークォーツ セツナ（戦闘開始時とピンチ時にSTRとSPD増加 風属性）

クォーツ 行動力2 攻撃2 省EP2 回避2 EP2 混乱の刃

†クラフト†

一の舞・夜桜 30 大円 一瞬で敵の背後に回り静かな、しかし強力な一閃を放つ。確率50%で「戦闘不能」に

二の舞・雪花 20 単体 無数に敵を切りつけすべての斬撃は的確に敵の急所を切り裂く。技/アーツ駆動解除

三の舞・雪月花 30 中円 目にも止まらぬ速さで敵の頭上に飛び、強力な一撃の斬撃を繰り出す。行動順を遅らせる。

真・麒麟功 30 自己 体内の気を瞬時に練り上げ、一定ターンSTRとSPDを急激に上昇させる。

月下の洗礼 50 中円 CP+50

四の舞・死の演舞 40 単体 敵を死へと誘う剣の舞。確率90%で「戦闘不能」に

†Sクラフト†

終の舞・桜花乱舞殺 全体 攻撃 閃光の如く目で追うことのでき

ない剣技、全体の敵を無数に切り付け敵を薙ぎ払う。確率80%で「戦闘不能」に

ルシフェリオン・ブレイカー 直線 攻撃 広大な魔法陣を展開し打ち出す収束砲、前方の敵をすべて一掃する。

ルシフェリオンはやってしまった感があります、まあティオも似たような技あるしなんとかなるでしょ（笑）

もともとリリスは某魔法少女の星光の殲滅者をモデルとしているのでこの技はぜひ入れたかったんですね……

賛否あると思いますがまあ……勘弁してください、ああこんなクラフトもあるんだな〜ってな感じで見てください・w・

10話「儂い笑みを浮かべる少女」

リリスはロイドたちと別れた後バスに乗りクロスベル市へと帰ってきた。

「ようやく帰ってきましたクロスベル市です。」

1日ぶりに帰ってきたクロスベル市を見てリリスはつぶやく。

零の至宝の少女との出会い、そして少女を守る特務支援課との出会い、赤い星座との邂逅、かつて1時期ではあるが自分を助けてくれたヨルグマイスターとの再会、蛇の使徒と執行者との思わぬ再会、今まであまり人と関わることをしなかったリリスにとっては非常に濃い1日だったのは言うまでもない。

「ほんとにいろいろあった1日でした……うん？あれは……」

彼女の前から身なりのいい3人組が歩いてきた。

「たく、自治州の警察如きが俺たちに説教とは舐めた真似をしてくれたな！」

「しょうがないさユーリ。だけど所詮あいつらには説教が精一杯なのさ。」

「そうだな、俺たちを裁くことはできないんだ、そこまで怒るなよユーリ。」

「（なるほど、彼らは共和国の人ですか……）」

現在クロスベルでは外国の人を裁くことはできないのだ。だから警察も迂闊に逮捕することはできない、なんとも世知辛い世の中である。

「ほんとですね、規制が変わるようにデーター市長にはがんばってもらいたいものです。」

なんの文に反応したのかはわからないがそれはスルーするでしょう。

「はい、それは気にしてはいけませんよ。」

うん………スルーだだスルー………

「さてと、歓楽街ですか………」

住宅街を抜けリリスが訪れたのは歓楽街、アルカンシエルを見るとロイドとヨルグの言葉が頭をかける。

「（早いうちに会った方がいい………ですか）」

リリスは今すぐにも最愛の姉に会いたい、しかしまだ心の準備が足りていないのだ。

姉と別れたのは8年、もしかしたら自分のことがわからないかもしれない、ひょっとしたらすでに自分のことは忘れているかもしれない。リリスにとってただそれが怖かった。

「（はぁ………まだなぜいなくなったのかと怒られるほうが気が楽………ですね………）」

リリスの頭の中はすでに姉との再会したときのビジョンで一杯である。

だからだろうか、考え事をしていたので気づかなかった。自分に近づく1つの影に……

ーードンー

「きゃっー」

「え？……あ、ごめんなさい！」

非常にレアである、リリスがこんな可愛らしい悲鳴をあげるのはい後ないかもしれない。

「えっと、大丈夫です、ボーっとしてた私が悪いんです。」

「それは私も同じだから、こちらこそごめんなさい。」

両方とも頭を下げる光景とはなんだろうか、これでは埒があかない
と思いリリスが口を開く。

「ふふ、これでは話しが進みませんよ。」

「あはは、そうだね、でも本当にごめんなさい。」

「もういいですよ、あなたは別……ってあなたは……リーシャ・マオ？」

リリスが今ぶつかったのはクロスベルでは最早有名である。

アルカンシエルで電撃デビューを果たした期待の新人リーシャ・マオその人なのだ。

「うん、そうだよ。あなたの名前も聞いていいかな？」

「私はリリスです、よろしくお願いしますね。リーシャさん。」

「こちらこそよろしくねリリスさん、ていつか呼び捨てでいいよ？ そんなに年も変わらないと思うし……？」

「私も呼び捨てでいいです。私は17ですけど……リーシャは？」

「わかった、でもすごい偶然かな、私も17だよ。」

「同年……ですか……」

「うん？どつかしたの？」

「いえ……（これで同年なんて不公平ではありませんか？）」

リリスがなぜこんなことを思っているのか、それはゲームをやった

ものならわかるはずである。

「ただ……ずいぶん立派なものをお持ちなのだと……決して大きくて羨ましいなと思ったわけではありませんよ？はい。」

いや、本音ダダ漏れである……

「あはは……でもいいもんじゃないよ？肩なんてすぐ凝って痛くなるし……」

「それは私たちにとっては贅沢な悩みですね……」

「あはは……ごめんね……そうだ！こうして出会えたのも何かの縁だしそのアイス屋でなにか食べない？」

そういつてリーシャが指差したのはアルカンシエル前に構えてあるアイスの露店である。

「いいですね、ここのアイスはおいしいと聞いたことがあります。」

「ふふ、それじゃさっそくいきましょ。」

そうして二人はアイスを買って食べた後雑談に花を咲かせていた。

「そうだったの…… 8年ぶりにクロスベルにね。」

「はい、いい時期に帰ってこれたと思ってますよ、たくさんの人たちに出会えましたし、何よりリーシャにも会えましたからね。」

そういつてリリスは満面の笑みでリーシャに言う。

「／／／そ、そうなんだ、私もリリスに会えてうれしいよ。」

リーシャもリリスに笑顔で返す、だがリリスは違和感を覚えた。彼女の浮かべた笑顔が無理のあるように見えたのだ、この違和感はやほど感のいい人か^{ロイド}リリスくらいしかわからないだろう。

なぜリリスがわかるのか、簡単なことである。それは8年前にリリスが最愛の姉へと向けていた同じ“夢い”笑顔なのだから。

「リーシャ…… 1つ聞いてもいいですか？」

「うん？ なにかな？」

「リーシャはどうして……そんな儚い笑顔をするんですか？」

「……えっ？」

リリスは問うた、リーシャの顔が驚きに染まる。

「あなたのその笑顔は無理をして笑っているように私は感じました……違いますか？」

リリスは真剣な面持ちでリーシャに問いかける、リーシャも何の冗談かと思ったがあまりにも真剣な顔のリリスを見てその笑みを消して口を開く。

「どうして……どうしてそう思うの？」

リーシャは素直な疑問を口にする。

「簡単なことです、その笑みは8年前に……私が大好きな姉さんの元を離れるときに浮かべていた笑顔ですから……」

リリスはそう言って笑みを浮かべる、まるで過去の自分に問いかけるように。

「お姉さんの元を……？」

「はい、だから思ったんです、あなたの笑みの違和感に。」

「そう……だったんだ……」

リリスとリーシャは直感的に感じただろう。“私たちは似ている”と。

だからこそリリスはリーシャの力になりたいと思い彼女に聞く。

「私に……話してはくれませんか？
まだ知り合って時間は経っていませんが……私はリーシャの力になりたいんです。」

「どうして……そこまで私にしてくれるの……？」

リーシャの疑問は当然である、どうして今知り合ったばかりの他人にここまでしてくれるのかわからなかった。

「リーシャはきつと……イリア・プラティエに救われたのでしょうか？」

「っ！？」

リーシャは驚いた、まさかそこまで自分のことを言い当てられるとは思わなかったからだ。

「当たり前……ですね。」

「でも……それは理由にならないよ、イリアさんに救われたことが、リリスが私の力になりたいということにはならないはず！」

「いえ、なりますよ。なぜなら私もイリア・プラティエに……“姉さん”に救われたのですから。」

「リリスもイリアさんに？……姉さん……？」

「はい、改めて名乗ります。
私の名前はリリス、リリス・プラティエです。イリア・プラティエの……妹です。」

10話「儂い笑みを浮かべる少女」（後書き）

リーシャは敬語がメインな気がしたけどリリス相手には砕けた話し方に見えました。

ロイドの見せ場をリリスにとられたのはやってしまった感がないわけではない……

5章でリーシャを仲間にするときはリリスメインで行きたいと思っています。

終章をなぜ5章というのかというと、ぶっちゃけそれで終わらすつもりはないです、オリジナルの章を入れてそれを終章にしようかと思っています。

もちろんメインはリリスで進んでいきますので楽しみに！！

11話「リリスとリーシャ」

「リリス、リリス・プラティエです……イリア・プラティエの妹です。」

「イリアさんの……妹……？」

リーシャは驚いたであろう、イリアに妹がいたという話を聞いたことがなかったからだ。
だが不思議とそれが嘘とは思わなかった、心当たりがあったのだ。

「ふふ、いきなりこんなこと言われても信じられませんか？」

リリスが力のない笑みで言う、しかし返ってきた言葉はリリスには予想だにしないものだった。

「いいえ、信じるよ。」

「えっ？」

おそらくイリアは誰にもリリスのことを言っていないだろう、故にアルカンシエルの中でも知ってる人はいない、ならばなぜリーシャは

信じてくれるのか。リリスはそれが気になり聞いた。

「……どうして……信じてくれるんですか？」

「うん、イリアさんはいつも舞台の練習は真剣そのもの。
見に来てくれるお客さんたちを満足させられるように絶対に手を抜
かないんだ。」

「……昔から変わってないですね、姉さんは……」

「うん……でもね、いつも練習が終わったあとよく一人で夜空を見
てるんだ……すこし悲しそうな表情で。」

「夜空を……ですか……」

リリスは昔から夜空を眺めるのが好きだった、それはイリアも同じ
こと。

昔、リリスがまだイリアの元にいたときはよく二人で夜空を眺めな
がら話しをするのが日課だった。

リリスにとっても、イリアにとってもそれはかけがえのない時間だ
ったのだ。

「それでね……ある時私は聞いたの、イリアさんが夜空に向かって

……誰かの名前を呟いたのを。」

「っ？」

リリスの心臓が素早く鼓動する。

「リリスの名前を聞いたとき……何かが引つかかったの、どこかで聞いたことある名前だって。」

「……それは……」

「うん、その時イリアさんが呟いた子の名前は……リリス、あなたの名前だよ。」

「……あ……あ……」

リリスは気づけば涙を流していた、姉は自分のことをまだ覚えていてくれたことが嬉しかった。

そしてそれと同時に、自分が知らぬ間に姉を苦しめてしまっていたことが許せなかった。

今のリリスにあるのは嬉しさと後悔が半々といったところか。

「……姉さんは……姉さんはまだ私を……覚えていてくれたんですね……」

「うん、そして今もきつと……リリスに会いたいと思ってるよ。」

「そう……ですね、どうやら心の問えはとれたようです。リーシャ、ありがとうございます。あなたのおかげで私は前に進めそうです。」

そういつて微笑んだリリスの顔はもはや偽りの笑顔ではなかった。そこにあつたのは真正銘リリスの心からの笑顔だった、それにつられリーシャも笑顔になる。

「あ……」

「うん？どうしたの？」

「いえ、今のリーシャの笑顔、違和感がありませんでした。やっと見せてくれましたね、あなたの本当の笑顔を。」

リリスは今まで見れなかったリーシャの本当の笑みを見て言った。

「……ふふ……リリスには本当に敵わないよ、うん……こんなふうに心から笑ったのは久しぶりかもしれない。」

「そうですか、……ねえリーシャ……私はあなたに会えてよかったと心から思います。」

「どうしたのいきなり……」

「私は今あなたに救われた気がします、だから……リーシャのことも……聞かせてはくれませんか？」

リリスは確かに今この場でリーシャに救われた、それはリリスの嘘偽りない思いである。
もしリーシャの話を聞けなかったら過去を吹っ切れなかっただろうから。

「……うん……私のこと……聞いてくれるかな？
不思議だけど、リリスには聞いてほしいと思ってる自分があるの。
私が今まで誰にも話すことができなかったことを……」

リーシャにあるのは不安だけなのかもしれない。
今から話すことは彼女が誰にも話したことがないことだからだ。
リリスはおそらくリーシャのその気持ちを直感的に感じた、だからリリスは優しい口調でリーシャに問いかける。

「聞かせてください、リーシャのことを。さっきも言いましたけど、私はリーシャの力になりたいんです。」

「ふふ、ありがとうリリス。」

「そうだね、まずは……リリスは 銀 を知ってる？」

「はい、たしか東方人街伝説の暗殺者と言われている人ですよね。」

リリスの言った通り 銀 は東方人街伝説の凶手として恐れられている人物である。
その正体は不死身だの不老不死だの言われているが詳しく知っているものはいない。

「うん、リリスの言うとおり……そして……」

リーシャは一呼吸置いて言う。

「銀の正体は……“私”なの。」

リリスは目を見開く、銀は裏の世界ではとても有名だ、その人物が目の中の少女だというのだから驚くのは必然である。

「そう……でしたか……リーシャがあ……」

「うん、やっぱり驚いちゃったかな。」

「はい、でも不思議とそこまで驚きはしませんでした。なぜかはわかりませんが。」

たしかにリリースは目を見開いて驚いた、しかしそこまで驚愕なことではなかったのだ、リリースの中では。

「ふふ……あ、月……」

「そうですね、暗くなったのに気付かなかったなんて……」

二人はかなり話し込んだのだろう、すでに時計は18時になるといったところだ。

「きれいな満月ですね……そういえばリーシャは 月の姫 を演じていたんですね？これもリーシャの力でしょうか。」

リリスは笑いながら言う。

「ふふ……」

月は、光にして影……

多分それは、私という存在が月に似ているからだと思っの。」

リーシャはも笑いながら話す、リーシャの話は続く。

「本来は陽のあたる場所に出てくるはずのなかった存在……」

「でもリーシャは、姉さんに出会って光を掴むことができたはずで
す……それは確かでしょう？」

「うん、イリアさんに出会い私は変わることができた、これは否定
しないよ。」

「だけど私は……私という存在を作った流れは深く底知れないもの
がある。」

銀 という一子相伝の流れ……父から受け継いだ密やかな道は。」

「なるほど…… 銀 は家系のようなものだったのですね、だから
不死身とも不老不死とも言われた。正体を知らなければそう言われ
ても不思議ではありませんね。」

リリースは一つの 銀 についての謎が解けた、不老不死や不死身と言われているような秘密があるのかと思ったが家系で受け継がれているというのなら納得である。

「リーシャが 銀 ということはわかりました……よろしければ……クロスベルに来るまでのあなたのことを聞かせてはくれませんか？私の知らない、リーシャ・マオを。」

リリースの問いにリーシャは迷わずに答える。

「うん。」

リリースは瞳を閉じて……ゆっくりと語り出す。

「気づいた時には私は父と共に在った。」

・
・
・
・
・

「母の記憶はないかな。」

多分、 銀 の道を私に受け継がせるために父が遠ざけたのだと思うの。」

「だけど私にとってはそれが普通で……過酷な鍛錬も、暗器や符術の修練も淡々とこなしていただけだった。各地を転々としながら、日曜学校に通い、人と接する術もそこで得た。」

「父は厳しくもなく優しくもなく、ただひたすら教えるだけ……それというのも、銀として受け継ぐことが膨大すぎたからかな。それは代々の銀の記憶……どのような状況でどんな工作を行い、どんな標的をどのように仕留めたか……時代を通して同じ存在であるため、その全てのあらましを受け継ぐ必要があったの。」

「全てを受け継いだ時……私は銀 そのものになった。といつても、父が存命である限りは銀 になることはないよ。」

銀 はただ一人……それは変わることがないから。しばらくの間、父の帰りを待ちながら穏やかに過ごす日々が続いた。そして、父が帰ってきたらいつ 銀 を継いでも問題ないように仕事のあらましを教えてもらう……」

「既に表の顔は持っていたけれどそれが私にとっては世界の全てだった。」

「その世界が崩れたのは父が不治の病に倒れてから……代々の銀の中でも卓越した力を持った父だったけど……病魔からは逃れられなかった。」

「さりとて抗うこともせず、延命のための手術も受けず……ある日私を呼んでこう言ったの。」

自分を殺して 銀 を継ぐようにと。」

「できなかった。

およそ、父の言うことに逆らうことのなかった私だけどそれだけでは何故かで出来なかった。

……私は初めて恐くなった。

あれだけ父が丹念に仕上げた 私 が出来損ないだったのではないかと。

死にゆく父を失望させたのではないかと。

……懊悩する私に父はふと苦笑して言ったんだ。

『それもまたお前だ』 『お前の銀はお前が決めるがいい』 ……そして一月後、父は亡くなった。」

「そして私は 銀 になった。

父の持っていたコネクションを継ぎ、黒衣と内功で体系を誤魔化し

……父の腕には及ばなかったけど滞りなく仕事を再開できた。

『お前の銀はお前が決めるがいい』

父の言葉の意味もわからぬままただ淡々と流されるようにして……」

「そして2年が過ぎ、私は黒月と長期契約を結んだ。

カルバードの西端……貿易都市クロスベルの覇権奪取に協力するという契約を。」

「クロスベルに到着した私は戦いに備え、街の下見をする最中、歓楽街でとある劇場に入った。

そこでは丁度、公開練習というものが行われていて……そこから先

はリリスの知っている通りかな。」

・ ・ ・ ・ ・

「……そうでしたか……その時に姉さんに目を付けられたというわけですね。」

「ふふ、最初は理由をつけて何とか入団を断ろうとしたんだけど……でもイリアさんは凄く強引で……とうとう根負けして入ることになったの。」

「（ふふ、姉さんもほんとに相変わらずですね）」

「体力と偽装には自信があったから、いい隠れ家になると思ったかな。」

「……予想以上に練習がハードで 銀 との両立が大変だったよ。」

「ふふ……ありがとうございます、リーシャ。聞かせてくれて嬉しかったです。」

リリスは嬉しかった、自分のことを信頼してここまで話してくれたのだから。

「ふふ、聞いていて面白い話ではなかったと思うけど……
でもこれが……父と祖先から私に受け継がれた“道”……アルカン
シエルという光を手に入れたとしても……その“道”を完全に捨てることは多分に私には出来ないと思う。」

「そうですか……」

リリスは何かを思うようにリーシャに言う。

「お前の銀はお前が決めるがいい」

「……………え……………」

「……………銀は全てを受け継ぐ。」

リリスの言葉は続く。

「アルカンシエルという光をあなたが見出してしまった以上……
銀もまた、光という側面を受け入れざるを得ないのではないで
しょうか？」

「そ、それは……」

「どんなものも時代が変われば在り方も変わります……いえ、変わらざるを得ないんですよ。」

「そうやって人の歴史は受け継がれ、前に進んでいきます。」

「おそらく、そういったことも含めてお父様は言いたかったのではないのでしょうか？」

「……………」

「あなたの行為が許されることではないのかも知れませんが……」

「それでもあなたは、あなたの 銀 を目指せばいいと思いますよ。」

「あるいはここで 銀 という存在を完全に断ち切るというのも一つの道かもしれません。」

「そうだったとしても多分ですが、お父様は気にしないのではないのでしょうか？」

「リスは最高の笑みでリーシャに言う。」

「『それもお前だ』って笑って。」

「……………あ……………」

「…………いいお父様ではないですか。
普通の家族とはすこし違いますがちゃんとリーシャを愛していた…
…私はそんな風に思います。」

「…………お父…………さん……………」

リリスの言葉がリーシャの心に染み渡る。

「どう…………して…………
お父さんが亡くなった時も…………こんな…………
…………涙なんて…………ぜんぜん零れなかったのに……………」

リーシャの目から涙が零れる、ようやく何かから解放されたように。

「多分ですけど、姉さんたちとの日々であなたは変わったのだと思います。

これから先、あなたがどんな道を進むか分かりませんが…………私でよければ、お父様の代わりにあなたのことを見守らせてください。
光を掴んだあなたが、どう変わっていくのかが見たいですから。
あ！もちろん私のことも見てほしいです、私ももう、迷いませんから！」

リリスの眼は強い輝きを持っていた、もう迷わない。
姉さんも守って見せるし、何よりリーシャのことも見守っていく。

リリスのそんな思いがリーシャを包む。

ーギューッー

「リ……リリス……」

「あなたはもう一人じゃありません。

姉さんもいるし私だっています、必要があるなら頼ってください。
必ず……力になりますから。」

リーシャのリリスを抱きしめる腕に力が入る。

「リリス、少し胸を借りていいかな？」

「どうぞ、リーシャがスッキリするまでずっとこうしていますから。」

「ありがとう……リリス……」

今このときリリスとリーシャは本当に心の通った親友へとなった。

いや、もしかしたら二人は親友以上の……固い絆で結ばれたのかも
しれない。

11話「リリスとリーシャ」（後書き）

ふう、長かった……

ほぼ終章のロイドのセリフをとりましたがいかがでしたでしょうか。

このまま行くとリーシャはイリアの元を離れないんじゃないかな？とか思うかもしれませんがすでに構造は決まっておりますので期待してください。

というか原作崩壊するかもしれないですけど……まあちょっとだけ変わるかな。

あとなんかガールズラブぽい終わりになってしまいました但那がそんなことはありません。二人は親友です、ただほかの人より仲が良すぎる感じですが……」

12話「姉妹」

歓楽街のベンチに座っている2人がいた。

「ねえリリス、決心はついた？」

銀としての過去を話した少女、リーシャ・マオと。

「はい、もう大丈夫です。ありがとうございます、リーシャ。」

おなじみ我が主人公リリス・プラティエである。

「ふふ、どういたしまして。」

たぶん今の時間帯だと練習は終わっただくらいかな。」

「もうすぐ夕食時だというのにがんばりますね。」

「そうだね、もうすぐ各国の要人が集まるゼムリア通商会議があるからね。」

アルカンシエルはその要人たちを招いて講演をするからイリアさんも気合が入ってるんだと思う。」

「なるほど、それは気合が入るに決まってますね。
おそらくその人たちも姉さんなら骨抜きにしようですね、
もちろんリーシャの演技もですけど。」

「ふふ、でも私はまだただけどイリアさんならそうなくてもおかしくないかな。」

2人してイリア・プラティエを絶賛しまくりである。

「しかし……ゼムリア通商会議ですか、おそらく赤い星座が動きま
すね。黒月もでしょうけど。」

「そうだね……私もたぶん 銀 として黒月に協力しないとだから
……」

そうなのだ、リーシャは黒月と契約を結んでいるため赤い星座など
が動き黒月も動くことになれば否応なくリーシャも戦うことになる。
そこでリリースは気になることができたので聞く。

「でもそれだと公演はどうするのですか？」

「ああそれは大丈夫だよ、講演のある日は 銀 の仕事は空けてあ

るから。」

「なるほど……でもそれだといひ方は悪いかもしれませんがバレル可能性が高いのではないですか？もしかしたらすでに黒月の幹部あたりなら気づいていてもおかしくありません。」

リリスの言うことは正しい、もし 銀 が仕事を断る日がアルカンシエルの公演日とかぶっていることが知られてしまえば確実にアルカンシエルの関係者だとわかってしまう。

なにより恐ろしいのは正体をネタに何をされるかわからないことだ。

「うん……たぶんだけど……ツアオさん……黒月の人なんだけどね、その人はたぶん私の正体に気づいてると思う……」

「そうですか……もしリーシャの正体を餌に脅しでもしてくるものなら私は黙っていませんよ。OHANASHIしなければいけませんね……」

「ふふ、リリスがその気になったら黒月も簡単に黙っちゃいそうだね。」

二人そろってそんな会話をする、暗い話題はどこへやらである。

「さて、そろそろ行こうリリース。」

「はい、ドキドキしますね。」

二人はアルカンシエルの扉をくぐり中へと入っていった。

リリース s i d e

受付のほうも変わってないですね、懐かしいです。

「……誰もいないですね。」

受付のほうにはいつも誰かいた気がするのですが今はいませんね。

「きっと舞台のほうかな、講演に向けて団長さんといろいろ話してるんだと思う。」

「そうですね……この扉の向こうに姉さんがいるんですね………」

「そうだよ、イリアさんきつとすごく驚くと思うな。」

ううゝゝ、すごく緊張します。

怒られてしまっただいしょうか、8年も離れていましたし……あうゝゝ。

「……………」

「リリース？」

「はっ！すみません、すこし思考の海に落ちてたようです。」

「いけません、しっかりしないと。久しぶりに姉さんに会えるんですから……！」

「ふふ、大丈夫。私も傍にいるからね。」

「ありがとうリーシャ………では、いきましよう。」

「うん。」

――ガチャ――

そして私は舞台への扉を開けて足を踏み入れた。

リリース s i d e e n d

イリア s i d e

こんばんわ、イリアよ。

私は今公演に向けて団長達と打ち合わせをしているわ。

「もうすこしここを大きく見せたいのだけどどうかしら？」

「ふむ、できなくはないかもしれないが……間に合うかね。」

「大丈夫よ、私がしっかり見るからいけるわきつと。」

「すごい自信だよな、でもなぜか実現できそうだと思えるところがすごいところかな。」

「できそうじゃないの、やるのよシュリ。」

「わかってるよ。」

そうよ、みんながんばってくれるからきつといいものができるはず。

今までのどの講演をも超える最高の舞台が。

そういつて私が指示を出そうとしたとき入口の扉が開いた。

ーガチャーー

入ってきたのはリーシャと……フードをかぶっていて顔が見えないけど誰かしら……

「リーシャ姉どうしたんだ？今日はリーシャ姉の練習は終わったはずだけ。」

「そうだな、リーシャ君どうしたんだね？それにその子は……」

やっぱりあの後ろの子が気になるのね、ほんとに誰かしら……でも妙な感覚ね、本能的にあの子のことを知ってる気がするわ。

「はい、特に用事はないんですけど。
彼女がイリアさんに用があるんです、話を聞いてあげてくれませんか？」

私に？ファンかしら……そうね、話を聞くくらいならいいかしらね。

「わかったわ……それで、私に用ってなにかしら？」

「……………」

喋らないわね……人見知りするタイプなのかしら……

「ほら、大丈夫だから。しっかり！」

リーシャがフードの子に小声でなにか言ってるわね、ほんとに誰なのかしら……

……あら、ようやく喋る気になったみたいね。

「……………あ……あの！……………」

えっ？今の声……………忘れるわけがない、8年前と変わらぬ声……………も

しかしてこの子は！

イリア s i d e e n d

リリス s i d e

「……………あ……………あの！……………」

声が出ないです……………緊張しすぎて……………どうしよう、とりあえず
なにか言わないと……………

私が声を出そうとしたとき先に沈黙を破ったのは姉さんでした。

「リリス……………」

「えっ？」

「リリス……………なの……………？」

あ、ダメですもうダメです、名前を呼ばただけで涙が出てきました。

うまく喋れないですよもう……………

「……………うあ……………」

「ねえ、顔を見せてくれないかしら。あなたの顔を私に見せて。」

もう私は迷わなかった、そう言われた瞬間自分がかぶっていたフードを取った。

「あ……………ああ……………」

ダメですよ姉さん、姉さんが泣いたら私……………止まらなくなっちゃいますよ……………

「ねえ……………さん……………わた……………し……………」

私が喋ろうとした瞬間……………

「リリースー!!」

ーガバッー

「……………」

私は抱きしめられていた。

リリース side end

12話「姉妹」(後書き)

短いです、次でイリアとリリスの甘々空間を作ります。

それとプロローグで名前しか出なかったあの人も出ます。
お楽しみに！！

13話「はしゃぐ姉と戸惑う妹」

リリース s i d e

「あの、姉さん？」

「な〜に？リリース。」

「どうして私は先ほどからずっと姉さんの膝の上に座っているのでしょうか・・・」

そう、今私は姉さんが住んでいるマンションの部屋で姉さんの膝の上にいる。

周りにはリーシャとシュリ、そして私のもう一人の姉な存在のセシルさんがいる。

みんなに視線を移すがみんな苦笑するだけ……私を助けてくれるものはいないのですか！！

……対する姉さんかというと……

「そんなの決まってるじゃない！！リリースが可愛いからよ！！」

「／／ね、姉さん。恥ずかしいですよ………」

「恥ずかしがってるリリスも可愛いわ。」

「／／うゝゝ、セシルさんゝゝ」

「ごめんね、リリスちゃん。今のイリアは誰にも止められないわ……」

「そんなゝゝゝ、シュリ！リーシャ！」

「リーシャ姉このお皿どうしようか？」

「えっとね、奥から順に並べてくれる？」

「わかった。」

「なっ！？華麗に無視！？助けてくださいよゝゝゝ」

ほんとに誰か助けてください！あまりの恥ずかしさに頭がおかしくなってしまうそうです……。

「リリス〜〜〜」

「ふにゃ〜〜〜〜〜〜／／／」

もう、もう限界です……………

リリス s i d e e n d

リーシャ s i d e

リリスがイリアさんに抱きしめられて顔を真っ赤にしてる、あ！悲鳴が……………

「リーシャ姉、リリス姉は大丈夫なの？」

「あはは……………きっと大丈夫だと思うよ、それよりもご飯の準備しちやおう。シュリちゃん。」

「うん。」

リリスがイリアさんと再会した後は大変だった。
何が大変かって二人とも30分くらいずっと抱き合ってたまま泣いて
て慰めるのが大変だった。

そのあと泣き止んだイリアさんが団長とほかのメンバーにリリスの
ことを紹介。

イリアさんはリリスのことを止め処なく話すのでみんな顔が引きつ
つてたのは秘密ね。

まあ8年ぶりに再会できたんだからしょうがないのかも知れないけ
ど……リリス、ずっと顔真っ赤にしてたね。たしかにあんな紹介さ
れたら誰でも恥ずかしいよ……あまりに恥ずかしすぎて内容は言え
ないけど……。

そしてイリアさんの部屋に私とシュリちゃん、イリアさんにリリス
で来た後にすぐイリアさんはどこかに電話をかけて……少しした
ら汗を額に浮かべたセシルさんがやってきた。どうやらイリアさん
とセシルさん、そしてリリスは昔によく3人で遊んだそうだ。

リリスに聞いたらセシルさんにはもう一人の姉のようによくしても
らったらしい。

セシルさんが来てからが一番大変だった。

イリアさんもセシルさんも両方リリスを自分の膝の上に座らせたが
ってそれが原因で喧嘩になった。

私はそのときこれは大変なことになったと思い焦ったけどすぐ治ま
った。簡単なことだ。

リリスが目には涙を貯めさらに上目使いで二人に『お願いです、喧嘩しないでください。』これだけで騒動は治まった……………余談だけどリリス以外の私たちはそのリリスの顔を見たときみんな同じことを思った。「なにこの可愛い生物」と。

そんなこんなで今はみんなでご飯を食べている。

「でもなんか信じられないな、リリス姉が姉な感じがするよ。」

「ちょっとシュリ、それはどういう意味かしら？」

さて、なぜシュリちゃんがリリスのことリリス姉と呼んでいるかというと二人はちょっと話してすぐ仲良くなったからだ。二人ともいい友達ができたと喜んでたっけ。

「ふふ、でも私は今幸せです。またこんな楽しい生活が送れるなんて……………」

ふとリリスがこんなことを言った。

「なにを言ってるのよ、これからずっと送るのよ？この生活を。」

「姉さん、またお世話になってもいいですか？」

「そんなの当たり前、あなたは私の可愛い妹なんだから。」

「／／／ありがとうございます、姉さん。」

「ふふ、ほらリリース、あ〜ん。」

「あ、あ〜ん。」

「ーパクッー」

「おいしいです。」

「もうほんとに可愛いわリリース。」

「ちょ／／／姉さん！ー！」

「……………甘々な空間……………リリースが可愛いと思ってしまったのは秘密

だからね。

リーシャ s i d e e n d

リリース s i d e

「ふう、大変な目にありました……………」

「ふう、災難だったわねリリースちゃん。」

「あ、セシルさん。」

セシルさんと会えたのも嬉しかったですね。
昔と同じですごくやさしいのは相変わらず、すべてを包み込むような温かさを持った人です。

「それにしても…………よく帰ってきてくれたわね……………」

「私は……………帰ってきてよかったのでしょうか……………」

私は不安になりそんなことを言った。

その瞬間私はセシルさんに抱きしめられた。

「セシル……さん？」

「あなたが帰ってきてくれたこと、イリアから電話をもらったときほんとにかどうか疑ったわ。

でも今あなたはここにいて、それが今とても嬉しいのよ？私だけじゃなくてイリアももちろんね。」

「……はい……」

「ふふ、もう絶対に勝手にいなくなつてはダメよ？もしいなくなつたら怒るからね。」

「はい、もう絶対にいなくなりません。」

はい、もう絶対に……姉さんたちの傍からいなくなりませんよ。また掴めたこの日常を……必ず守って見せます。

この後姉さんにセシルさんに抱きしめられたことを言ったらなぜかご立腹に。

一緒に風呂入って寝ると言ったら機嫌が直りました……

リリース side end

14話「迅雷と赤の戦鬼」

リリス side

久しぶりに姉さんと再会しセシルさんとリーシャ、シュリを交えてご飯を食べた後、すこし時間ができたので私は裏通りのイメルダ店を訪ねることにしました。

「相変わらず怪しさいっぱいの通りですねここは……………」

それも仕方ありません、少し前まではマフィアが根城にしていた建物がありますからね。

「うん？……………あれは……………」

私の前に2人の男女が出てきました。

1人は昨日カジノの前で出会った女の子、シャーリイです。
もう一人は……………

「なんかランディ兄弛んでたね、今のランディ兄と戦っても楽しくなさそう。」

「フ、そう言うな。」

奴には 闘神 を継いでもらわなければならん、戻ってくれば足りないものは俺が鍛えてやるからな。」

「あはは、そうすれば昔のあのランディ兄に戻るのかな?。」

「ああ、戻ってもらわなければ困るがな。」

まさかここでオルランド親子に遭遇するとは思いませんでした。しかし……あれが 赤の戦鬼 ですか……威圧感がひしひしと伝わってきます。

「……触らぬ物になんとかです、さっさと行きましょう。」

でも思った通り……シャーリイに見つかり声を掛けられてしまいました。

「あはは……あれ?……リリース?。」

……恨みますよ、運命さん。

「……昨日ぶりですね、シャーリイ。」

「うん昨日ぶり、でもこんなところでリリースは何してるの?」

「私はすこしそのイメルダ店に用があって立ち寄ったんですよ。」

「ふうん、そうなんだ。」

私がシャーリイが話していると戦鬼のほうからなにかを感じます。
軽めですが……殺気ですね……

「……なんですか? 私にはあなたに殺気を当てられる覚えはないのですか?」

「ほう、今の殺気に気づくか……シャーリイ、この娘がお前の言っていたリリースか?」

「うん、そうだよ。」

「どうかなお父さん、リリース……強いでしょ?」

「……ああ、そうだな。おそらく……俺でも戦えばタダでは済まないだろう。」

過大評価しすぎ………とりたいところですが私は負けるつもりはありません、あなた方がこのクロスベルに害するというなら私は………

「いきなりそんな評価されても困るのですが………そういえばあなたには名乗っていませんでしたね。

………リリース・プラティエです。よろしくお願いします。」

「シグムント・オルランドだ………だがお前の眼は俺を知っていると云っているようだか？」

「っ！？驚きました、そこまでわかるのですか………」

これは素直に驚きました、眼を見て相手のことがわかる………ですか。単純な人なら私も大抵何を考えているかはわかりますが………表情は崩してないはずなんですけどね。

「まあ慣れのようなものだ、戦場に居続ければ嫌でもわかるようになる。」

「なるほど、さすがは最強の獵兵団 赤い星座 の副団長ですね。」

「フ、しかしお前の実力を認めたのは本当だ。
さすがは最強の執行者候補 迅雷 ということが。」

まさかここでその名を聞くことになるとは思いませんでした、やはりつながりがあるんですね。

「やはりあちらとつながりがあるんですね……………」

「フ、さあな。

だが仮に奴らと知り合いでなくとも 迅雷 の名は有名だ、遊撃士あたりなら大抵のやつは知ってるだろう。」

そこまで有名なのは知りませんでしたね、元々迅雷の名前を付けたのは使徒の二柱です。あの人……今度あつたらしっかりOHANA SHIしないと……………。

その使徒というと……

「っ……！」

「うん？どうしました？ 深淵」

「いえ、なんでもないわ。ただリリスのお話というワードが聞こえただけよ……」

「……………知りませんよ私は、あなたが知らないところで彼女の迷惑になることでもしたのではないのですか？」

「覚えがないけれどおそらく……………そうなのかしら……………たしかカンパネルラがトラウマになっていたわね……………」

「そういえばそうでしたね、カンパネルラの憔悴しきった顔とリリスのスッキリした顔は今でも鮮明に覚えていますよ。」

「……………一度クロスベルに行ってリリスに謝ろうかしら……………」

「やめてください、これから我々は大切な計画の為に動くのですよ？」

「わかってるわよ、カンパネルラにでも伝えてもらおうかしら。」

「それがいいでしょう、ただ……………」

「ただ……………なんなの？」

「代わりにカンパネルラがお話しを受けるのでは？そうすると恨まれますよ？」

「……………やっぱり謝りに行ったほうがいい気がするわ。」

「せめて計画の後にしてください。」

「……………わかったわ……………」

ひそかに怯えている使徒の二柱であった。

リリス視点へ

うん？今遠くから誰かの怯える声が聞こえた気がします……………誰でしょうか。

「どうした？」

急に黙ったので気になったのかシグムントさんが聞いてきました。

「いえ、なんでもありません……一つ聞いてもいいですか？」

「……………なんだ？」

「あなた方が誰かに雇われてこのクロスベルに来ているのは知っています、その仕事内容は……このクロスベルという街を壊すこと……ですか？」

「フ、悪いがそれは言えんな。」

やはりそうなりますよね、でも……………

「そうですか……………先ほど名乗った通り私の名はリリス・プラティエ、イリア・プラティエの妹です。」

「へえ、名前聞いて思ったけどやっぱりイリアの妹だったんだ。」

「ええ。」

「ふむ、だがそれがなにかあるのか？」

「大いにあります、もし……もし姉さんや私の大切な友人たちを傷つけたら……」

そして私は一呼吸置き……

「私は……あなた方を許さない。」

「……まあ覚えておこうか、そろそろ行くぞシャーリィ。」

「うん……うん。」

「ではまたな 迅雷 よ、次に見えるのを楽しみにしているぞ。」

「……それじゃあねリリス、また会おうよ。」

「はい、できれば会いたくはありませんがね。」

そう言って2人は暗闇の中へと消えていった。

リリス s i d e e n d

シグメント side

迅雷 か……………よもやあそこまでとはな。

「恐れたか？シャーリイ。」

横を歩くシャーリイに俺は聞く。

「う……………うん、初めて……………かな。人の殺気にあそこまで恐くなったのは……………」

「そうか。」

たしかにあそこまで濃い殺気を出せる者はそうそういないだろう。
シャーリイはたしかに 赤い星座 の部隊長で実力はあるが、まだ
年もそこまで行かぬ子供だ。
恐れてもしようがないだろうな。

「だが……………戦ってみたいと思っただろう?」

こんなことを聞くのは……………今さらか。

「うん！恐かったけど、シャーリイはリリスと戦いたい、それで銀とも戦いたいかな。」

「フ、そうか。どうやら今回の仕事は退屈せずに済みそうだ。」

「そうだね、早く戦いたいな〜。」

ほんとにな、ランドルフを連れ戻すついでに……………迅雷、お前にも楽しませてもらおうか。

シグメント side end

15話「特務支援課は迅雷を知る」

ロイド side

「ランディ、気にするなよ。」

「ああわかってるさ、心配すんな。」

「ああ……………」

おそらく俺たちの知らないランディの過去が今ランディを苦しめているのだろう。

俺はリーダーとして何もできないのか……………」

「あれは……………リリースじゃないかい？」

ふとワジが前を指差して言う。

「えー！……………ほんとだ、でもなんでリリースがここに？それにあれは……………」

なぜリリスが今こんなところにいるかわからない、そしてそれ以上に……

「お前らあの女の子の知り合いか？……というより……何を話しているんだ？」

「そうだね、普通の子があの人達と話すことはないはずだし……」

二人とも気になってるようだな……

「とりあえず近づいてみよう。」

「おう。」

「ああ。」

俺たちはリリス達に近づき話が聞こえる位置まで来た。
先に口を開いたのはリリスだ。

「そうですか……先ほど名乗った通り私の名はリリス・プラティエ、イリア・プラティエの妹です。」

なっ！？イリアさんの妹だって？…………聞いたことはなかったけどこれは驚いたな。

「おいおいマジかよ…………イリアさんに妹がいたなんて聞いたことないぞ。」

「そうだね、これは後で彼女にいろいろ聞きたいことかな。」

「そうだな、でも…………リリスが言っていた 太陽 のようなお姉さんってイリアさんのことだったんだな。」

「ああそういえば言ってたね、なるほど。」

リリス達の話は進んでいく。

「大いにあります、もし…………もし姉さんや私の大切な友人たちを傷つけたら……………」

空気が痛いのがわかる…………これがあのリリスなのか？

「私は…………あなた方を許さない。」

「「「!?」」」

リリスの静かなその声は確かに濃密な殺気を纏っていた。

「この殺気は……ほんとにあの子のなのか？」

「……だろうね、でもここまで濃厚なもの……」

やっぱり二人とも思うことは一緒か……話が終わったな。

「ではまたな 迅雷 よ、次に見えるのを楽しみにしているぞ。」

迅雷？聞いたことがないな、リリスのことなのか。

「なあランディ、ワジ。 迅雷 って聞いたことあるか？」

「いや、俺は初耳だな。」

「………僕もないね。」

「そうか……」

二人も聞いたことがないか……

「おっと、リリースって子も行っちゃまっぞ？どっするんだ？」

「とりあえず行くぞ、聞きたいこともあるし……」

俺たちはリリースのもとに行った。

ロイド s i d e e n d

リリース s i d e

ふう、話し込みましたね。

さっさと用事と済ませて帰らないと姉さんが怒りそうです……

「イメルダ店はあゝ「リリース」！」？」

「あなた方は……ロイドさんとワジさんに……えっと……」

「俺と君は初めてだな、ランディ・オルランドだ。よろしくな。」

なるほど、赤い星座の……

「初めまして、リリス……大方さっきの話は聞いていましたね？
気配がするとは思ってましたので。」

「っ！？気づいていたのか……」

驚いていますね、まあ無理もありませんか……

「はい……改めましてリリス・プラティエです、イリア姉さんの妹です。」

「あ……ああ……」

「ふふ、そんなに困惑しないでください。

こうして名乗ったのは理由があるのですよ。」

「理由？」

ワジさんが聞いてきました。

「ロイドさんは言ってくれましたね？早いうちに姉に会った方がいいと。」

「ああ、マインツ山道で会った時だな。」

「私自身悩んでいたんですが、この街でできた私の大切な親友のおかげで私は姉さんに会うことができました。」

何度思い出しても忘れることはできません、リーシャにはほんとに感謝しています。

「そうか、イリアさんに妹がいたってのは驚いたけど……リリース、今幸せなんだな？」

そんなの……そんなの当たり前ですよ。

「はい、私は今とても幸せですよ。」

「そうか……………それでだりリス、もう一つ聞きたいことがあるんだ。」

聞きたいこと……………話からすると 迅雷 についてですかね。

「さっき 迅雷 という言葉が聞こえたんだけど……………あれはリリースのことなのか？」

やっぱりですか……………此度の計画に結社が関わってくるなら隠すわけにもいきませんね……………

「……………はい、その 迅雷 という名は私の……………身喰らう蛇 執行者としての名です。」

「……………」

「……………」

ロイドさんとランディさんは驚いています、ワジさんは驚いていませんね……………

「驚きましたか？」

「あ……ああ……まさかここで結社の名前が出るとは思わなかったけどな。」

「そうだな、エステルちゃんたちに聞いて以来だったからなあ。」

あの人たちに関わっていればやはり知っていますよね。

「一つ誤解のないように言えますね、たしかに私の 迅雷 の名は結社での二つ名です。ですが私はあくまで執行者候補だったというだけで結社の一員というわけではありません。」

アリアさんに誘われはしましたがそれだけです、私は結社の一員ではないのですから。

「そうだったのか……」

「はい……おっと、思わず話し込んでしまいました。」

「そうだな……悪かったな、時間とって。」

「いえ、これですこしは私に関してわかっていただけたと思うので私としては有意義な時間でしたよ、今度またみなさんでアルカンシエルに来てください。しっかりおもてなしますよ?」

「はは、それは楽しみだな、イリアさんやリーシャちゃんにも会える、なおかつ今日知り合った美少女のリリスちゃんにも会えるなんて絶対行くしかねえな。」

「美少女って／＼／」

「ああ悪いリリス、ランディはこついうやつだから。」

「そうだね、いつか刺されないように気を付けたほうがいいよ?」

「おいワジ、それは俺じゃなくてロイドだろ?」

「フフ、それもそうか。」

「おいおい、何のことだよ?」

なるほど、かなり鈍感とは思っていましたが本当のようですね……

「「「はあ……………」」」

「なんで溜息をつくんだよ！てかりリスも！？」

「ふふ、ごめんなさい。」

では私はそろそろ用事を済ませたいのでお暇させていただきますね。

」

「ああ、時間とらせて悪かったな。」

「いえ、ではみなさんまた。」

「またな。」

「また会いに行くぜ、リスちゃん。」

「また会おう。」

ほんとに賑やかな人達ですね……………ついに知られちゃいましたか、

私の秘密。

でも……………あのことに比べたらこの程度のことなんてどうでもいいこと……………ですね。

「いつかは知られてしまうのでしょうか、そうになったら私は……………彼らの元に……………姉さんの傍にいられるのでしょうか……………」。

はあ……………今考えても仕方ないですね……………

「今はこの生活を守ることだけを考えましょう、それが今私にできる唯一のことです、そうですね?。」

このリリスの問いかけは誰に対するものなのだろうか。
だが微かにリリスの首元にかけてあるルシフェリオンが赤く輝いたのだった。

リリス s i d e e n d

16話「明かされる過去」

リリース side

いけません、思った以上に遅くなってしまいました。
セシルさんたちが帰ってからだいぶ経ちますね、姉さん怒ってるで
しょうか……

「えっと……ただいま帰りました……姉さん……」

恐る恐る私は声をかけます。

「……遅かったじゃない、リリース。」

「……怒ってますか？姉さん……」

「……別に怒ってないわよ？リリースの帰りが遅すぎるとか言ってる
ってないから安心していいわ……」

「……怒ってますよね？完全に……」

「えっと……ごめんなさい姉さん、なんでも言つこと聞くので許してください。」

「……ほんとになんでもいいのね?」

「え……ええ。」

今姉さんの眼がピカンと光った気がします。

……あれ?でもなぜか顔が真剣ですね……一体何を言われるのでしょうか……

「それじゃあねリリース、一つだけ教えてほしいの……」

「教えてほしいこと?なんでしょうか?」

結社のこと?それとも旅をしていた時のことでしょうか……

「……私の所に来る前……リリースはどこにいたの……?」

「……えっ……」

何を……言ってるんですか？姉さんは……

「私があなたを保護する前、リリースはどこで何をしていたの？」

真剣に私に問いかける姉さん、いつか聞かれるとは思ってましたが
こんなにはやく聞かれるとは……

「それを聞いて……どうするつもりですか？」

「別にどうもしないわ……ただ一つだけ8年前にあなたに言えな
かったことがあるのよ。」

「私に……言えなかったこと？」

なんでしょうか、思い当たることがないです……

「ええ、あなたに言えなかったこと……それはね。」

ふざける空気ではないですね……でも、一体……

「リリースはいつまで……一人で背負うの？」

「っ!？」

「リリースがどんなものを背負ってるのか私は知らない、でもね……
あなたが一人で抱え込んでいるのを見るのはもう嫌なのよ!」

「……あ……」

「私は……リリースが大好きよ?たとえ血がなくなっていなくても……
私のたった一人の……可愛い妹なのよ?」

「あ……あ……」

「8年前私は後悔したわ、私がリリースのことをもつとしつかり見れていればリリースはいなくならなかったのかもしれないって……」

「ち……ちが……」

ダメです、声が出ないですよ……

「ねえリリース……もう一度言っわ、私はあなたが大好き……あ

あなたの苦しみを分かち合ってあげたい……………」

「ねえ…………さん……………」

「無理に話してくれ……………とは言わないわ、リリースの心の整理が
いたときに話してくれれば……………私はそれでいいから。」

姉さんはやさしすぎますよ、こんな私のためにそこまでしなくても
……………」

「ほんとに……………姉さんには敵わないですよ……………」

「リリース……………」

「お話しします……………私のことを……………でもその前に……………」

「どうしたの……………リリース。」

「盗み聞きとは感心しないですよ？……………リーシャ。」

「えっ？」

やっぱり驚いていますね、いつもの姉さんならわかったとは思いますが、今日は仕方ないですか……

「……………ごめんなさい……………その……………」

リーシャがとても暗い表情をしていますね。

「リーシャ……………あなた……………帰ったんじゃ……………」

「すみませんイリアさん、忘れ物をしてしまって……………それで……………入ろうとしたら……………話し声が聞こえて。」

「そうだったの……………」

たしかにあんな話をしていたら聞いてしまいますか……………

「リーシャも……………私の話を聞きたいですか？」

「……………リリースはいいの？イリアさんも……………」

「私は……構いません、姉さんはどうですか？」

「リリスがいいというなら私も構わないわ。」

「わかりました……リーシャも聞いていってください。
お二人だからこそ……私も話してもいいと思ったのかもしれませんが。」

これは私の正直な気持ちです……でも……不安です。
私はこの二人に……大好きな二人に拒絶されてしまいそうで……

「リリス、私はずっとあなたの傍にいるわ、これだけは忘れないでね。」

「姉さん……」

「私もだよ？リリス、ずっと……あなたを見守っていくって約束したから。」

「リーシャ……」

私は…… 幸せものですね…… こんな素敵な人達に知り合うことができたのですから。

「わかりました…… それではお話ししますね……」

「ええ。」

「……………」

さてまずはなにを話しましょうかね……

「まず最初に…… リリスという私の名前は…… 私がつけたものです。」

「どういふこと……?」

姉さんが聞いてきます。

「私に名前はありませんでした…… いえ、一つだけ…… ずっと呼ばれていた名前はありましたね。」

「ずっと……呼ばれていた名前……」

リーシャも聞いてきます。

「はい……被検体157番……これが……私の呼ばれていた名です。」

リリース side end

16話「明かされる過去」(後書き)

あと1話か2話で2章に入ります。

17話「過去秘密、そして星光の殲滅者」

「被検体157番、これが私がずっと呼ばれていた名前です。」

リリスの口から聞かされた過去の自分の名前、しかしそれはとても人の名前と呼べるものではなかった。

「「っ!?!」」

衝撃の発言にイリアとリーシャは驚く、同時に二人の脳内には考えたくない、けれどもそう思わずにはいられないものが思い浮かんだ。

「きっと……二人の考えてる通りですよ。」

「そ……そんな……」

「……………」

イリアは信じたくなかった、だがイリアの頭に浮かんだのは自分がリリスを保護した時のことだ。
リリスは表に出るような服ではなくなぜそんなものと思ってしま
うほどボロボロな服を着ていた。

よく見てみればよく病院で患者が来ているような服にそっくりだったようでもある。

その時の事を思い出し、考えたくないことが現実味を増してきたのだ。

片やリーシャは表情を崩さずあまり驚いてないかのように見える。

しかしそれは嘘である、ただ言葉が出ないのだ。

もし自分の考えていることが真実ならばリリースの過去は自分が想像した以上に残酷なものになる。

その真実を聞きたくない自分と、リリースを見守ると誓った自分が相反する。

「D・G教団を……………知っていますね……………？」

「え……………ええ、少し前にキアちゃんを攫おうとした連中のことよね？ 弟君達が街中を逃げてるのを私とリーシャは見たもの。」

「はい、たしか警備隊の人達が薬物で操られていたとも聞きました。」

D・G教団幹部司祭のヨアヒムが起こした事件である。

彼が作り出した薬物 グノース を使い、警備隊を操りキアを攫おうとしたのだ。

しかし、特務支援課と遊撃士によりヨアヒムは倒され事件は解決した。

これが今に語られる教団事件である。

「はい、その事件のことは私も知ってますのでおそらく間違いないでしょう。」

リリースも教団事件のことはすでに調べていた。

クロスベルで起こった出来事はたいていリリースは調べている。

それが教団のこととなるとなおさらだ、警察が解決しなければ自分が赴くと考えていたのだから。

「私は……………」

リリースは一呼吸置き

「私は……………姉さんに拾われる前……………D・G教団にいたんです……………」

「……………」

二人の考えが現実になった、リリースの言葉によって。

「……………そこで私に行われていた、彼らでいう儀式は二つ……………」

「……」

イリアとリーシャのどちらが言葉を発したかはわからない。

「一つは他の子供たちとあまり変わらない……多くの薬による薬物投与。」

薬物投与だけでも充分に下種な行為、だがもう一つあるとリリスは言った。

重たい空気の中、リリスが続きを話す。

「もう一つは……これはおそらく公にはされていないことです、警察でも遊撃士でもおそらく知っているものはいないでしょう。」

そうなのだ、それに関する資料はリリスがすべて逃げるときに処分した。

だから知っているものは誰もいない、すでに調べてあることが警察と遊撃士にとっての真実なのである。

「もう一つは……別の人格の植えつけです……」

「なっ！？そんなことができるわけ……………」

イリアがそんなもの信じられないとばかりにつぶやく。

「はい、常識的に考えてそんなことできるとは思いませんが、無理矢理に人格を壊すというなら可能です。」

「……………なら……………その儀式は失敗……………ということ？」

リーシャが言う。

「……………いえ、成功しています。」

「え……………まさか!？」

イリアが何かに気づいたように言葉に出した。

「姉さんは……………気づいたようですね……………」

「そん……………な……………そんなことって……………」

イリアの目から涙が流れる、自分の考えた最悪の予想がリリスに肯定されたからだ。

「……………」

リーシャはまだ気づいていなかった、そこでリリスが話しを再開する。

「私への人格の植え付けは成功しました……………ふふ、本来の私はこんなに大人しい口調と性格ではありません。
目上の人にも礼儀を弁えず、口調もひどかったのですよ。」

リリスは昔を思い出してすこし自嘲気味に話す。

「そ……………それじゃ……………今のリリスは……………」

リーシャもついに気づいた。

「はい、今の私は本来の私ではない、作られた人格ということです。」

「あ……………」

リーシャは何も言えなくなってしまった、目の前の自分と年の変わらない少女が作られた存在だというのだから。

「ここで……………私のリリスという名前にたどり着くんです。」

「……………聞かせて……………くれる？」

イリアは声が上手く出てないながらもリリスに聞く。

「はい、私はその儀式のあと……………何度も何度も……………とてつもない破壊衝動に襲われました。」

なんでもいい……………なにかをとてつもなく壊したくなったんです、人でも物でもあらゆるものすべてを……………」

リリスはその瞬間服を脱ぎだした。

イリアとリーシャは若干顔を赤くするがすぐにその顔は驚愕に染まる。

「そこで私は自分の破壊衝動を抑えるために……………自分を傷つけることにしたんです。」

リリスの胸の下から背中まで数えきれないほどの切り傷がある、おそらく果物ナイフのようなもので切り付けたのであろう。

「姉さん……私は昔一緒にお風呂に入ることを何度も拒みましたね、そして入るときはいつもタオルを巻いていた……この傷を見せたくなかったから。」

「っ……………」

イリアは昔何度もリリスをお風呂に一緒に入ろうと誘った、頑なに拒むものだから単なる照れ隠しだとずっと思っていた。だがリリスが時折苦しい表情を浮かべていたのを思い出した、イリアは後悔の念に駆られる。

「この傷を作り衝動を抑える…………でも…………まだ10にも満たない子供がこれを耐えられると思いますか？」

耐えられるわけがない、イリアとリーシャはすぐにそう思った。

「耐えられませんでした、でも私はずっと我慢した……………けどその時教団の人が私に言ったんです。『今お前が最も親しくしているものを殺せ、そうすればお前をここから出してやる』と。」

「つく！そんなこと………リリース？」

イリアが声を上げようとしたが止まる、なぜならリリースの目から涙が流れていたのだ、なにかを思い出したように。

「私はその言葉を聞いた瞬間頭が真っ白になりました、そして私はその親友を殺したんです。

でも………その時でした、自分がボロボロになりながらその親友……

……リリースはずっと私に声をかけていた。」

「「っ！？」」

「あなたが一番苦しんでるのは知ってる、私はあなたのことが大好きだから。」

「だからあなたに受け取ってほしいの、私の名前を。」

もう殺されてしまったからいけないけど、家族がくれた私の宝物。」

「大好きなあなたに受け取ってほしいの、そしてどうか生きて。」

そうすればきっとあなたを受け止めてくれる大切な存在に会えるわ。」

リリスがリリスに送る言葉。

大切な存在を想い、自らその存在のために命を渡した少女の言葉。

「リリスが死んだあとずっと私は泣きました……でも不思議と私の破壊衝動は起きなくなっただんです、もしかしたら……リリスが私を守ってくれているのかもしれない。」

イリアとリーシャ二人が知ったリリスの名前の秘密。

同時に思った、もう一人のリリスという少女のことを。

「そして私はリリスの名をその身に宿して決意したんです、教団から逃げることを……しかし私は戦いなんてしたことありません、逃げ出そうとしてもすぐ捕まってしまう。」

その時です、私の中に……植えつけた人格の戦いの記憶が流れ込んできたのが。」

「戦いの……記憶？」

「はい、それもそうでしょう。」

私はその人格の人物そのものと言っても過言ではないのですから。」

「……………」

「そして私はその記憶をもとに……私がいた教団のロツジを破壊しました。」

イリアとリーシャは驚く、戦いの記憶というものが流れ込んできたとしても9歳の少女がそんなことできるわけがない、そう思った。

「ふふ、やはり信じられない話ですよね……………ルシフェリオン。」

リリスが首元にかけられた赤い球体、ルシフェリオンの名を呼んだ。その瞬間赤い光に包まれ姿を現したのは魔道杖のようなものだ。のだ。

「それは……………杖なのかしら……………リ……………リリス？」

イリアはリリスの首にかけられた赤い球体が形を変えたのに驚いたが、なによりリリスの顔を見た瞬間言葉を失った。

今のリリスは髪の毛が黒から濃い栗色へと変わり、真紅の瞳は陰りのない蒼色へとなっていた。

しかし二人はなによりリリスの目に恐れた、まるで何にも興味を示さない冷酷な瞳に見えたのだ。

「これが……私のその時の姿であり流れ込んできた記憶の持ち主
……………」

リリスはまるで表情を変えずその蒼色の目で二人を写しながら言う。

「 星光の殲滅者 です。」

17話「過去の秘密、そして星光の殲滅者」（後書き）

やっとルシフェリオンの装備出せた！

なぜ星光の殲滅者の技が使えるかをこいう形でしてみました。
タグ欄にほんのすこしなのは入るかもってのはこれですね。

なのはのキャラが入ってくることはありません。

あくまでリリスが星の記憶を持っているというのと技が使えるという
ことだけです。あと1話で2章入ります。

18話「私はリリス」

教団ロッジの入り口から一人の少女が出てきた。

魔道杖のようなものを手に持ち、ボロボロの服に身を包んだ少女だ。

「これで……………すべてを無に……………」

ロッジに杖を構えると少女に赤色の光が集まる。

「集え明星、全てを焼き消す焰となれ……………ルシフェリオン・ブレ
イカー……！」

少女から放たれる赤色と黒色の混ざったような収束砲がロッジを飲み込み。

煙が晴れたとき残ってるものはなにもなかった。

リリス s i d e

ロッジを破壊した時のことを話したあとに齎されたのは静寂だった。

「怖い……………ですか？」

今の私の話しに言葉を失った二人に声をかける。
私は異端です、もし二人が拒むなら私は…………

「……………たしかに怖いと思っただわ、でも……………でもリリスが私の妹
ということに変わりはないわ。」

「え……………」

私には姉さんの言葉が信じられなかった。
こんな私を見てそんな言葉が出てくるとは思わなかったからだ。

「リリスが話してくれた過去はたしかに壮絶なものだった、でも……………
だからこそ私は今リリスの傍にいたいという思いは前よりも強
くなったわ。」

「どう……………して……………わた……………し……………は……………」

「気持ち悪い……………なんて言うとも思っただとしたら心外ね、
リリスは世界で一番可愛い私の妹なのよ？」

もう涙が止まらない、私は作られた存在なのに、人を殺したのに、
どうして……

「作られた存在だとか人を殺したとか、たしかにリリースにとって
は忘れることのできないことだと思う……けど、リリースはその殺し
てしまった親友の為に生きることを決めたんだよね？ならそれは…
…とても強くて……立派なことだと私は思うよ。」

リリースもどうして……私はそんな存在じゃないのに……

「ねえリリース……私たちはリリースにとって……大切な存在にはな
れないのかしら？」

「えっ？」

そんなこと…

「私はリリースの全てを受け止めるわ、だって……リリースは……私に
とって大切な存在なんだもの。」

姉さん、そんなこと言われたら私は……

「私もリリスのことを受け止めるよ、私にとってもリリスは大切な存在で……ずっと傍にいたいと思う親友なんだから。」

姉さんとリーシャの言葉に私は我慢ができなくなった。

私の蒼色の瞳から涙が落ちる。

「私にとっても……二人は大切な存在です……当たり前じゃないですか、私だって二人のことが好きです。好きで好きでしょうがないくらいに好きです。
でも……だからこそ怖かった！この話をして二人に拒絶されることが！私は……私は……」

私はすべてを吐き出した、自分の心の中にあつたこと全てを……
そしてその瞬間

――ガバツ！――

私は二人に抱きしめられていた。

「ふふ、やっと言ってくれたわね、私もリリスが好きよ？大好き。」

「私もだよ、私もリリスが大好き。」

もう涙が我慢できなくなった、だから私は二人に言う。

「姉さんにリーシャ……すこし……服を……汚してしまうかもしれない」

「いいわよ、好きなだけ泣いて。」

「我慢しないでいいから。」

「あ……………あ……………」

私は二人の腕を抱きしめながら声を我慢せずに泣いた。

・
・
・
・
・
「もう……………大丈夫です、ありがとうございます。姉さん、リーシャ。」

私は二人から離れた、きっと私の今の顔はとても赤くなっているでしょうね。

「ふふ、私はもうすこし抱きしめていたかったけどね。」

「ね、姉さん／＼／」

「私もだね、リリース可愛かったし。」

「リーシャまで／＼／うゝゝゝ」

二人とも私をからかって楽しんでいますね……………恥ずかしさで顔が熱いです。

「リリース……………この先きつと大変なことはたくさんあると思うの……………そうになったら絶対私たちを頼るのよ？あなたは一人じゃないんだからね。」

先ほどの空気をなくし姉さんは真剣な顔で私に言う。

「そうだよ、ずっと私たちが傍にいるから……………リリースの力になるからね。」

リーシャも真剣な顔で私に言う。

「……………わかりました……………私はもう……………大切な存在を手に入れたいたんですね。」

こんな傍にいたのに私は気づくことができなかった、守ると決意したけどここまで確固たるものではなかった。今では思います、話してよかったと……………心から。

「そうだ！、今日は3人で一緒に寝ない??」

「あ、いいですね。私は賛成です。」

「え、ちよつと二人とも!??」

「なによ、リリースは私たちと一緒に寝るのは嫌なのかしら?」

その言い方は反則ですよ……

「そんなわけありませんよ、わかりました。一緒に寝ましょう／＼」

「ふふ、それじゃリリスが真ん中だね。」

「うう、恥ずかしいですね…………姉さん、リーシャ。」

私は二人に向かって人生最高ではないのかと自分で言いたくなってしまう笑顔で言う。

「ありがとう。」

少し時間がたつとそこには安らかに眠るリリスの姿と、その両サイドにお互いリリスの腕を抱きしめながら寄り添って寝るイリアとリーシャの姿があった。

リリス s i d e e n d

イリア s i d e

あの後私たちはベッドに入りリリスはすぐに寝てしまった、きっと疲れたんでしょうね。

リリスが話してくれた過去は確かに壮絶なものだった。

今までリリスがずっと溜めこんでいたのに気づけなかった自分自身にすこし腹がたってしまった。

でもだからこそ……この先私はリリスのことを見守り続けていくわ、もしまた何かを溜めこんだら吐き出すまで問い詰めるまでよ！

「ふふ、おやすみなさい…………私の愛しいリリス。」

あ！そうそう、リリスがあの後私の傍からいなくなって旅をしていた時のことも聞いたわ。

そのときに出てきた戦いを教えてくれたお姉さんのような存在の人にすこしばかり嫉妬してしまったのは内緒よ！！

イリア s i d e e n d

リーシャ s i d e

リリスの話を聞いて私のリリスに対する思いはさらに強くなった。

私がクロスベルに来て誰にも話したことのないことをリリスに聞いてもらい、私を受け入れてくれたリリス。

そして今リリスの過去を聞いて私は新たに思った、リリスを絶対に守っていくって。

私はリリスに救われた、だから今度は私があなたを救う番。
私にできることがどれくらいあるのかはわからないけど、必ずリリスの力になるから！

「おやすみ…………リリス、私の大好きな人…………」

あ！そうだった、リリスの旅の話を私も聞いた。
その時の話しに出てきた戦いを教えてくれた人に嫉妬したのは内緒だよ？

リーシャ s i d e e n d

18話「私はリリス」(後書き)

リリスは愛されキャラです。

なので若干百合っぽい表現が出てしまいましたがその辺はスルーだ！
でもけっこう簡単に終わらせてしまったかも。

早く2章に入りたいという気持ちが入ってしまったかな。

さて2章ではいよいよリリスとシグムントが激突します。
どういう結末になるのか、ご期待あれ！

ブローグ

姉さんとリーシャに過去のことを話してから数日が経った。

あのあと私は特務支援課に行ったりしてキーアを含めたみなさん
と交流し私の作ったお菓子を食べてもらったりした。
みんなに満足してもらいすごく嬉しかった。

その中でみんな私のことを喜んでくれた。
きつとロイドさんたちから聞いたのだろう、あれから時々ではある
がアルカンシエルのほうにも顔を出してくれる。

リーシャのお友達サンサンと一緒に服を買いにいたりもしたし、
リースさんと一緒に露店巡りなどもした。
リースさんには私の過去を話した、リースさんも私の力になると言
ってくれてとても嬉しかった。
けどリーシャとリースさんが会ったときお互い火花みたいなのを散
らしていたのは何なのだろう。

あと赤い星座のシャーリイと一緒にアイスを食べた。
まさか彼女とアイスの好みが一緒だったのは意外だった、もしかし
たら彼女とは気があうかもしれない。

さて通商会議を目前に控えた今日この頃、アルカンシエルは講演に

向けて忙しい。

そして各国の要人が集まるといふことで警察のほうも色々忙しい。
うだ。

さて、私も準備を進めよう。

必ず何かが起こるはずだから。

19話「公演に向けて」

リリース side

みなさんおはようございますリリースです、私は今アルカンシエルの劇場にいます。

講演を間近に控えた姉さんとリーシャのお手伝いをしています。

シユリは残念ながら今回の公演には出ません、でももうすぐシユリが出る舞台も考えていると姉さんが言ってたので近いうちにシユリが出演する舞台も見れそうですね。

さて、そろそろ休憩ですね、タオルと飲み物を持っていきましょう。

「姉さんにリーシャ、お疲れ様です。飲み物とタオルですよ。」

「あら、ありがとうリリース。」

「わざわざ用意してくれたんだ、ありがとうリリース。」

「いいいえ、私にできることはこれくらいしかありませんから。」

私はアルカンシエルの舞台に立って演技なんてそんな大それたこと

できそうにないですし……

「うーん、リリースも舞台に立って踊ってくれるともっといいものができそうなのだけれど……」

「姉さん、何回も言いますけど私には……」

この前からずっと誘われてしまいます、そのたびに断っているのですが姉さんがあまりに残念そうな顔をするのでちょっと複雑です。

「でも私だつてリリースと一緒に舞台を踊りたいんだけどな。」

リーシャも私と踊りたいと言ってくれます、本当に嬉しいんですけど……ごめんなさい。

するとそこに。

「二人とも、リリース君が困ってるじゃないか。

まあ……私自身もリリース君、それにシュリ君が加わることで更なる舞台が出来上がるのではないか、と思っているのだがね。」

「団長さんまで!？」

うっ、団長さんにもそのように言われてるのは光栄なことなのですが………やっぱりごめんなさい。

「ははは、まあ強要はしないよ。

リリース君がもしやりたいと思ったなら声をかけてくれたまえ。」

「わかりました………満足できる答えは返せないとは思いますが………」

なんか申し訳ないですね………うん？足音が5つ………これは………

「おや………」

団長さんが気づいたようですね

「あら、弟君たちじゃない。」

「どうも、お邪魔しています。」

そうです、現れたのは特務支援課の5人でした。

「皆さん、こんにちわ。」

ふふ、ランディさんもついに復帰されたんですね。」

そういえば姉さんとリーシャも彼らと知り合いでしたね。
私も挨拶しておきましょうか。」

「みなさん先日ぶりですね、こんにちわ。」

「リリースちゃんこんにちわ、先日のお菓子おいしかったわ、ありがとう。」

「そうですね、ほんとにおいしかったです、ありがとうございました。」

「そう言ってもらえると作った甲斐がありましたよ。」

私は先日特務支援課を訪れる際にお菓子を作って持って行ったのだ。
キーアはもちろんみなさん喜んでくれてうれしかったです。

「いやゝ、それにしてもイリアさんとリーシャちゃんの衣装姿……
マジで何度見てもイイッスねゝ」

ふとランディさんが言います、たしかに綺麗ですよ、同性の私が
らみてもそう思ってしまう。

「ふふ、どうもありがとう。」

「改めて言われると少し恥ずかしいですけど……」

何度も舞台に立っているのに今さら恥ずかしいなんて……

「それに、リリスちゃんも今日は普段と違う服だからいつそう可
愛いぜ。」

おや、次は私ですか。

嬉しいですけどたしかに間近で言われるとすこし照れちゃいますね。

「ありがとうございます、ランディさん。」

実はこの服、この前買い物に行ったとき買ったんですよ。」

そして私はその場でクルッと回ります。

「あ！白い」「ランディさん？」ひいひい。」

あれ、ランディさんが怖がっています、どうしたのでしょうか。

ランディさんの目線の先にいるのはおそらく私の後ろにいるリーシヤですよ……

私が振り向くと……

「どうしたの？リリース。」

素晴らしい笑顔でした……なにか黒い物が引つ込むようなのが見えたのですが気のせいですかね。

「フフ、確かにランディの視線はいやらしいからね。怒るのもしようがないさ。」

うわ、ワジさん度直球ですね……まあ私もそう思いましたけど。でも誰が怒ったんでしょうか……うーん、謎ですね。

「何だと、ワジ。」

俺はいたって純粋な気持ちで「はいはい、わかったからそのくらいにしてくれるかしら。」……

エリイさんがランディさんの発言を一刀両断……一時の静寂

「あ、あはは……」

ノエルさんの乾いた笑いがまあ私も同じ立場ならそうなります……

「騒がしくてすみません。」

ところで、今って練習中だったんですよね？」

「まあね。」

明日の夜の舞台に向けて調整していたところよ。」

「ふふ、明日はお客さんがお客さんだけに緊張もしますけど。」

「ああ、まさか各国首脳の方々が観劇にいらしてくれるなんてね。」

やはりリーシャも団長さんも緊張しているようです、私はすこしでもいいものができるようにしっかりお手伝い頑張らなくちゃですね！

「首脳が……」

「そういえば、今朝の対策会議でも議題に挙がっていたわね。」

なるほど、やはり警察のほうでもそのような話になっているのですね。

「フフ、何しろせっかくクロスベル招待するんだ。
アルカンシエルの舞台は最高の持て成しだろうからね。」

「ま、そう考えると、あつて然るべき趣向ってわけか。」

「でも、確かにそれは緊張しますよね。」

「ええ、他の団員の方たちもどこかしら落ち着かなさそうなんですけど……
……といつても、イリアさんはいつもと変わらないんですけど。」

「そうですね、だって姉さんは……」

「んー、だっていちいち気にしてもしょうがないじゃない。
客席に誰が座っていようと、とにかくベストを尽くすだけだし。」

「ほら思った通りです。」

「それが姉さんですよ、全然不安にならないですよ。」

「まったく君は……いつも呆れるほど頼もしいね。
今度のリニユーアル公演発案といい、その気力には毎度ながら感心するよ。」

団長さんの言うことももつともです。

「リニユーアル公演……」

「そういえば……今度『金の太陽、銀の月』をリニユーアルされる
んでしたね。」

「ああ、世間では既にもっぱらの噂だね。
何でも大胆なアレンジが加えられるそうだけど？」

そうですね、街中を歩いているとそういう話をしている人を見かける
ことがありました。

「ええ、そうなのよ。
一度完成したものに手を加えるのはある意味、挑戦だったんだけど……
脚本、演出の観点からもより完成度を高められそうな目処がよ
うやく付いてね。」

姉さんが部屋で唸ってましたねそういえば、ようやくいいものができそうって言って私を抱きしめてきたのをよく覚えています。

「はい、そして今度の一般公演が終わったら、約1ヶ月その特訓に集中させてもらう予定なんです。

「なるほど……アレンジといっても相当力が入っているみたいですね。」

「はい、イリアさんはリリスの出演も考えているんですが、リリスが頑なに拒むものですから。」

ここでその話題を持ってくるんですが……

「私は舞なんてできませんよ、まあ剣舞ならできなくもないとは思いますが……」

そうですね、一度アリアさんたちと旅をしていた時に暇だったので頭の中に浮かぶリズムに従って踊ってみたのですが、すごくきれいな剣舞と言われました。

「へえーあありリスで剣舞といえばマインツ山道の魔獣と戦った時
すごかったな。」

「えっ？……あああるときですね。」

そつえばありました、人形工房から帰るときでしたね。

「そうね、あときは魔獣と戦うのを忘れてリスちゃんの戦いに
魅入ってしまうくらいなもの。」

あまり褒めないで下さいよ、なんか姉さんの目が光った感じがしま
す。

「へえーリリース、詳しく聞きたいんだけど。」

これは……逃げませんね……

「……わかりました、あとでお見せしますよ……」

「フフ、じゃああとでね。」

「俺達も気になるなそりゃ、まあしかし『金の太陽、銀の月』は、アルカンシエルの舞台の中でも特に完成度が高いって評判だが……あれがさらによくなるなんて、どんな代物になるか想像できねえなあ。」

そうですね、ランディさんの言うとおりです、私も想像できないですよ……でもきつとすごいものができるのでしょね。

「ああ、本当だな。」

「フフ、舞台に生きていくと決めた以上は、常に最高のものを求めていかないね。」

観に来てくれるお客さんに最高の時間を過ごして貰えるような、素晴らしい舞台を作り上げること……それがアルカンシエルの、あたしたちアーティストの最大の使命なんだから。」

使命……ですか、私には……まだわからないです……

「舞台にかけては右に出る者がいないというか……流石はイリアさんですね。」

当たり前です！舞台において姉さんの右に出る人なんていないですよ！はい。

「うーん、リニョーアル公演が楽しみになってきました!」

「フフ、正式発表が近いうちにあるから待っていてちょうだい。

以前の公演を見てくれた人でも楽しんでもらえる出来になるはずよ。それに配役にちょっとしたサプライズもあるし……きっと驚いて貰えると思うわ。」

ふむ、そんなものがあるのですか……知りませんでした。

「サプライズですか……はは、じゃあ是非それも楽しみにさせてもらいますね。」

「ほんとに楽しみね……ロイド?そろそろ行かないと……」

エリイさんがロイドさんに言います、そうでしたね彼らは仕事でした……

「お、ほんとだ、そろそろ行くとするか。それじゃみなさん失礼しました。」

「ええまたいらっしやい。」

「みなさんまたいらしてください。」

「ええ、また来させてもらいます。」

「リスちゃんもまたね、今度ゆっくりお話ししましょう。」

「その時は私も一緒にしたいですね、お話ししたいことは私もありますし。」

「はい、その時はお菓子を腕によりをかけて愛情を込めて作るのでまた食べてくださいね。」

「がんばりますよ私は!!」

「あ／／愛情ですか……」

「わかったわ／／楽しみにしてるわね／／」

「うん？二人とも顔が赤いんですけどどうしたのでしょうか……」

「むっ！」

あれ、リーシャがちょっと睨んできます……私なにかしたでしょうか。

姉さんはすこし笑っていますし、ワジさんとランディさんも笑っていますね。

「うん？みんなどうしたんだ？」

「さあ？どうしたのでしょうか……」

「」「似たもの同士……」「」

姉さんとワジさん、ランディさんの声がかぶりました。

「」「？？」

私とロイドさんは二人そろって何のことが最後までわかりませんでした……

それからしばらくして特務支援課のみなさんは仕事に戻り……

「さあーリリス、あなたの剣舞を見せてもらいましょうか。」

あ、忘れてました……………仕方ないですね……………

「あまり期待しないでくださいね？」

そして私は剣舞を披露した後に姉さんとリーシャ、そして団長さんから是非舞台に出てくれと更に言われるようになったのは言つまでもない。

リリス s i d e e n d

19話「公演に向けて」(後書き)

なんかガールズラブ要素いれてもいいんじゃないかな?とか思ってきた。
まあやらないですけどね!!

でもすると個人的にヒロインはリーシャとフランは確実かな。
あとまさかの展開でアリアンロードとマリアベル……は無理がある
か・w・

20話「不安な思い」

リリス side

さてさて、みなさんこんにちわりリスです。

前回姉さんたちに剣舞を披露してなんとか誘いを断りながら時はす
でにお昼です。

姉さんとリーシャも休憩に入りました、私は何をしてるかって？リ
ーシャを探しています。

なにか悩んでいたようにも見えたので……

「リーシャは………あ！いました。」

前にリーシャと初めて話したアルカンシエル前のベンチに座ってい
ました。

「リーシャ、隣座ってもいいですか？」

おそらく通商会議のことでしょうが聞いてみましょう。

リリス side end

リーシャ side

「はあ。」

ダメだな、さつきから溜息しか出ない。

明日の夜は大事な公演があるから集中しないといけないのに……
その次の日は銀として黒月に協力しなければならない。
私が悩んでいるその時だった。

「リーシャ、隣座ってもいいですか？」

私の大切な親友リリスがそこにいた。

「リリス？うん、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

何しに来たんだろう、リリスがこうやって静かに横に来るときは大抵私が悩んでる時だった気がする。

「どうしたの？私になにか用事があったかな？」

私はリリースに聞く。

「はい、用事………というか話をしてみたかったんですよ、リーシヤが何か悩んでるように見えたので。」

「……………そっか。」

あはは、やっぱりリリースはすごいな。

よく私を見てくれてる、すごく嬉しい……………でも、私ってそんなにわかりやすいのかな。

「ふふ、なんでわかったのかな？って顔ですね。」

「わかるかな？」

「そうですね、確固たる確信があったわけではありませんが……………なぜかリーシヤのことだからわかってしまったんですよ。」

「私の……………ことだから？」

「はい、思えばクロスベルに来て姉さんの次に接しているのはリーシャです。それが大きな理由とは思いますが、何よりリーシャは私にとって大切な人ですからね。」

「え？／／／」

大切な人って……… リリスはそんな気持ちで言ってるわけじゃないんだろうけどそんな笑顔でいうなんて反則だよ／／／

「だが」……… 大丈夫ですか？顔が赤いようですけど。」

「な／／／なんでもないよ！／／／」

「？？？わかりました。」

ああダメだ、顔が赤くなってるのが自分でも分かるよ／／／

「それで……… やはり悩みがあるんですね？」

さっきとは打って変わって真剣な表情のリリス。

「うん………実はね。」

そして私はリリースに通商会議での銀の仕事を話した。

「なるほど………やはり黒月が動くのですね………」

「うん、だから私も行かなきゃいけないんだ。」

「そうですか、敵は赤い星座………というわけではないですね？」

そこまで調べ上げてるんだリリースは………

「うん、………ねえリリース？どうしてあなたはそんなにたくさんのことに詳しいの？」

つい私は気になり聞いてみた。

「え？ああそうですね、たしかに疑問を持たれても不思議ではありませんね。」

「うん。」

「簡単に言えば私はマインツ山道人形工房のマイスターと知り合いなのですよ、そこから私は定期的に情報を送ってもらっています。」

「人形工房ってあの……………」

なるほど、私もあそこに以前調べるために入ろうとしたが入れなかった。でもそれならリリースがたくさんのことに詳しいことが納得できる。

「はい、マイスター……………ヨルグさんが言っていましたよ？以前東方正人街の暗殺者が潜入しようとしていたって。」

「あはは……………」

すこし恥ずかしいよ……………

「それで……………話は戻しますが、敵は要人を狙うテロリストと見て間違いないですね？」

「うん、おそらくだけど帝国と共和国それぞれ二つのテロリストを

黒月と赤い星座で対処するんだと思うよ。」

でもイレギュラーはつきものだからそうとは限らないけど。

「なるほど、黒月のほうは相手を殺すまではいかないでしょうけどもう一方は……………」

リリスの思ってる通りおそらくそちらは……

「うん、赤い星座はおそらく……………殺すと思う。」

「……………そうですか。」

リリスが何か考え込んで……………

「ねえリリス、何か危ないことしようとしてる?」

リリスの一瞬ビクッと反応した。

「それはリーシャも同じでしょう……………そうですね、たしかにテロは許される行為ではありませんが殺すこともないでしょう、彼らも

何かの為に戦うのですから。」

たしかにそうだけど……でもそれじゃありリスは。

「でも……そんなことしたらリスは赤い星座と戦うことになるかもしれないよ?」

そうだ、多額のミラをもらって行動を起こすのだから殺すのを阻止するとなるとおそらく戦うことになるのは明白。

「……………そうですね、おそらく……………赤の戦鬼とも戦うことになるかもしれませんが。」

「っ!?!」

赤の戦鬼　　といえは獵兵団の中じゃ最強と言われてる人だ、そんな人と戦うなんて危険すぎる。

「ダメだよりリス!そんなことしたらリスは!」

ダメだ、リスがある程度強いのはこうしていてもわかる。けど!

「私が死ぬと……そう思いますか？」

「っ……………」

「大丈夫ですよ、私を信じてください。

私は死ぬわけにはいかないんですから、姉さんとリーシャ、そして私を支えてくれる人達のためにも……………だから大丈夫です。」

リリスの目は嘘を言っていない、それでも……………やっぱり私は心配してしまう。

「でも……………」

「心配性ですねリーシャは……………えい！」

「ーギョッー」

「え！？リリス！？」

いきなりリリスが抱き着いてきちゃったよ／＼／

「ふふ、リーシャは温かいですね。こうしてるとすごく安心します。」

「えっと／＼／＼……リリス？」

「私を信じてくださいリーシャ、私は……大丈夫ですから！」

あ……不思議、こうして改めてリリスの言葉を聞くとほんとに大丈夫な気がしてしまうから。

「……わかった、でも一つだけ約束して。」

「わかりました、为什么呢うか。」

「絶対に無茶しないで、怪我したら……なんでも私の言うことを一つ聞いてもらうから。」

なんでも……はすこし悪戯が過ぎたかな……

「ふふ、わかりました。」

でもそれはお互い様です、リーシャのほうも怪我したら私の言うこ

とを一つ聞いてもらいますからね？」

「あはは、うん、わかった。」

これは私も怪我するわけにはいなくなっちゃったな。

「あ、そろそろ休憩が終わるね、私は戻るよ。」

「はい、午後からの稽古がんばってくださいね。」

「うん。」

リリスの声を背に私は稽古へと戻っていった。

リーシャ s i d e e n d

リリス s i d e

「ふふ、本当に心配性なんですからリーシャは………」

そうですね、 赤の戦鬼 はたしかに強敵です。
おそらく無傷で勝利なんてのは無理でしょう。

「はあ、これは約束……… 覚悟しないとですね。」

さてと、私は自由ですし行政区を通じてオルキスタワーの視察でも
行きましようかね。

リリス s i d e e n d

20話「不安な思い」（後書き）

さてさて、行政区とオルキスタワーに行くということでフランとマリアベルとのフラグが立った！！

21話「クロイス家の令嬢」

リリス s i d e

私は今オルキスタワーに向かうため行政区にいます。

「見たところ入り口はこれだけなのでしょうが……………」

テロリストが攻撃をしかけてくるとしたら入り口からの突破……………
は無理ですね。

会議場は35階あたりのはずですし……………」

「だとすれば考えられるのは飛行艇ですか……………」

飛行艇で来るとするならば屋上に着艦し侵入するのが定石ですが…

……………」

おそらく要人たちの護衛には特務支援課に一課、そして風の剣聖が
出てくるはずですよ。

いかに数が多くても突破はほぼ不可能に近い……………」

「やめましょう、私が相手をするのはあくまで赤い星座、そちらの
ほうは警察にでもまかせるとしましょうかね……………」

おっ、あそこを曲がればオルキスタワーですね……………あれは……………

私の目の前に警察の服を着た女の子が歩いています。

まだ若いですね、私と同じくらいの子です。

「まあロイドさんたちも充分若い方ですから不思議なことではありませんね。」

でもすこし変ですねあの子……………なんかフラフラしてるようなんっ!?

その瞬間女の子が倒れそうになりました、私は瞬動を使い女の子を抱きかかえます。

あれ?この光景前にもあつたきがしますね……………

「間に合いましたね……………大丈夫ですか?」

「えっ?」

驚いていますね……………すごいデジャブです……………

「……………」

うん？なんか女の子にじっと見られていますね、どうしたのでしょうか。

「えっと………どうしましたか？」

「あ／＼すみませんボーっとしてしまっ／＼／」

「構いませんよ、ところでどこも怪我とかしてないですよね？」

「はい、大丈夫です、ありがとうございました。」

どこも怪我してないのですね、それはよかったです。

「それを聞いて安心しました、立てますか？」

「あ！すみません、ずっと支えてもらっ／＼／」

「ふふ、謝ってばかりですねあなたは。」

「うう／＼／＼ごめんなさい／＼／」

なんか可愛い子ですね……………それに……………どことなく誰かに面影が似てるような気がします。

「おそらく貧血でしょう、働きづめでは大切なときにそうなってしまいますよ？こまめにしっかり休憩を取ることをおススメします。」

「はい、ここの所あまり休んでいなかったもので……………」

あ、シュンとしてしまいました……………不謹慎ですが……………可愛いです！！

「なんとかかい……………いえいえ、では私は先を急ぐのでこれで失礼しますね。」

思わず声に出してしまうところでした……………

「あ、はい、本当にありがとうございました！」

私はその声を背にその場を離れた。

「あ！名前を聞くのを忘れました……………」

失敗です…………でもまた会えるでしょう。

リリース side end

フラン side

「あ、はい、本当にありがとうございました！」

私は今日素敵な出会いをしてしまいました。

貧血で倒れそうになった時私を助けてくれた女の人、すごく綺麗な方でした。

短い黒髪がとても綺麗で真紅の瞳はとても見ていて吸い込まれそうでした…………

「…………あ！名前を聞くのを忘れちゃいました…………」

あうゝ私のバカ！どうして名前を聞くのを忘れてしまったのでしょうか…………

「でも素敵な出会いだったのに変わりはないです！お姉ちゃんに話してみようかな」

そうだ、お姉ちゃんにも話してみよう、もしかしたら知ってるかもしれないし。

このフ란の考えがリリースとの再会を加速させるのはまた別のお話し。

フ란 s i d e e n d

リリース s i d e

行政区で女の子を助けた後私はオルキスタワー建設現場に来ています。

「まだ天幕が張ってあって見えませんが……… 壮大な光景ですね。」

IBCの建物よりさらに高く相当なミラをつぎ込んだのでしょうか。防弾ガラスやいろんな設備にお金がかかっていそうです………

そこに私の背後から声がかかりました。

「おや、珍しいですね、こんなところにあなたのような女の子がいるなんて。」

私が振り向くと…………

袁紹 g

「あんな無能な塊のお嬢様と一緒にしないでください！」

oh…………… 思っただけなのにキレのいい突込みが帰ってきました……………
…………… というかなんでそのネタをあなたが知っているのです？……………
まあ私が知ってるのも問題なんですけどね。

「…………… ナイスな突込みいただきました！さすがです。」

「なにがさすがなのかわかりませんが素直にいただきますわ。」

こういうノリのいい人は嫌いではありません私は。

「それで…………… あなたはどうしてこのような場所に？」

彼女が私に聞いてきます。

「はい、もうすぐ通商会議が行われるということで、その会場がどんなものかと興味がありましたので。」

「……そうでしたの、あなたは……そういえば名前を聞いていませんでしたわね。」

言われてみればそうでした、今度は自己紹介できますね。

「そうですね、リリス・プラティエです、よろしくお願いします。」

「いいお名前ですわね……プラティエというと……」

「はい、イリア姉さんの妹です、義理ですけど。」

やっぱりみんな驚くのでしょうか、イリア姉さんに妹がいるなんて公にされてないことだからでしょうかね。

「そうでしたの……」

「やっぱり驚きますか？」

「ええほんのすこしだけです……次は私が名乗りましょうか。
マリアベル・クロイスですね。以後よろしくお願いしますね？リリスさん。」

「（この人がクロイス家の……）」

これがキーアを取り戻すために戦い、すべてが終わった後、絶望の中にいた私を救い出してくれた一人の女性、マリアベルさんとの出会いです。

リリス s i d e e n d

21話「クロイス家の令嬢」(後書き)

最後のほうに若干終章のネタバレっぽいのを含ませました。

気づくのが遅かったのですがダグラスさんと異名がかぶってるのが
発覚いたしました……

なので今さらなんですけど二つ名を改名しようかと……

まあ考えるのがめんどくさいので 星光 でいい気がしました……

どうでしょうか……

22話「見通す瞳」

リリス side

みなさんこんにちわリリスです。
今私は何をしているかというところ……

「まあそうですね！」

――ナデナデー――

「はい、あの時はその親友に感謝しました。」

「リリスさんはいい友に恵まれているんですね。」

――ナデナデー――

「あゝ、マリアベルさん？」

「なんです？」

ーナデナデーー

「どうして私の頭をずっと撫でているのでしょうか……………」

そうなんです、先ほどからお話をしているんですがずっと頭を撫でられています……………」

「……………」ご迷惑……………」でしたか？」

ううゝそんな声で言わないで下さいよ、どこかの歌姫さんのような声なのでキュンとしちゃいます。

「……………」ご迷惑……………」ではないです。」

弱いな私。

「ふふふ、なら問題はありませんわ。」

「でもなぜ撫でるか理由は聞いてみたいですけど。」

「そうですね、強いて言うなら……」

「強いて言うなら？」

「リリースさんが可愛いからですね。」

「か／＼／かわいい……ですか／＼／」

ううう、面と向かって言われると恥ずかしいですね、今の私は顔真っ赤ですねきつと。

「ウフフ、照れている姿も可愛いですわ！」

「……マリアベルさんってすこし意地悪ですよ。」

なんか姉さんと同じ感じがします……

「意地悪ですか……リリースさんだけかもしれないですよ？」

「ほんつとに意地悪です！」

私だけって……あれですか？マリアベルさんってDSですね。

「しかし……………」

うん？雰囲気が変わった……………？

「本当にあの方たちの言うとおりの人でしたわね。」

「っ！？」

あの方たちって……………

「幼いながらあの 剣帝 を超える強さを兼ね備えた少女、会って
みたかったですよ？」

つながっているのは分かってましたが私のことまで知っていたとは
予想外ですね。

「私のことを知ってるということは……………私があなたたちの計画の
ことを知っているということもすでに掴んでいますね？」

知らないわけではないでしょうが一応聞いておきましょう。

「ええ、鋼の聖女 からある程度は聞かさせていただきました。」

「あの人から………ですか、それで………どうしますか、計画を知った私を消しますか？」

戦いが避けられないならしょうがないですけど………

「いえ、そのようなことはしません、私はあなたのことが気に入りましたもの。」

………はっ？

「気に入ったって………」

「そのままの意味ですわ、知り合ってますしですが、私はあなたのことを知りたいと思っています。」

「………警戒していた自分が馬鹿みたいです。」

戦闘も止む無しと思っていたのですが……そんなこと言われては興ざめです。

「フフ、できればあなたとは別の場所で会いたかったですわ。」

「私もです、私自身マリABELさんが敵じゃなくて……味方だったらって思っています。」

本当にそう思ってしまう、どことなくマリABELさんに抱かれて頭を撫でられているとき、姉さんと同じような感覚だったから。

「ならばあなたもこちら側へ来ませんか？」

「それはできませんよ、私はキアを救いたいと思ってるんですから。」

魅力的なお誘い……かはわかりませんができませんね。

「それは残念ですわね、でもたまには友人として会いに来てはくれないでしょうか？お話ししたいことがたくさんあります。」

「それなら大歓迎ですよ、事を起こした後でも会いにいきますよ。」

「ウフフ、それは嬉しいですね、楽しみにしていますわ。」

「はい、では私はそろそろ戻りますね。」

「わかりました、今日はお話できて楽しかったですわ、またお会いしましょうね。」

「こちらこそです、それではまた。」

ほんとに……… どうして敵なのでしょう、運命とは残酷ですね。

リリース side end

マリアベル side

「リリースさん、不思議な方でしたわね。」

使徒の方からリリースさんのことを聞いていたので会ってみたいと思っていました。

第一印象としては非常に可愛らしい方でした、そして噂に聞く強さも兼ね備えています。

あの方があそこまで言っていたのが理解できましたね、離してしまうとすぐに消えてしまつかもしれない儚い存在……

「リリスさん、あなたは幸福なヒロインと悲劇のヒロイン、どちらを選びますか？」

おそらく誰もが幸福を求めるでしょう、しかし……リリスさんはきっと大切な者たちのためなら喜んで悲劇の道を選ぶのでしょうか。

「私がリリスさんを抱きしめたとき、一度だけ警戒心を解いて身を委ねてくれました、私のことも信頼してくれているのでしょうか。」

そうだとすれば嬉しいですね、私自身先ほどリリスさんに言ったことは嘘ではありません、もっとリリスさんのことが知りたいですね。

そして……

「守ってあげたいですね……くれぐれも気を付けてくださいリリスさん。」

あなたの中に眠る闇の力を狙う者が…… ゆっくりそして静かに……
…ですが着実にあなたに近づいています。」

彼らが動き出すのはおそらく 碧き零の計画 の終了後。

結社のほうでは 幻焰計画 のために帝国に行かなくてはなりません
んが、おそらく 鋼の聖女 はリリスさんを優先するのでしょうか、
無論私もですが。

「リリスさん、あなたは一人ではありませんわ、数多の絆があなたの
力となり、そしてあなたを守ってくれるでしょう。」

このマリアベルの言葉は誰の耳にも届くことはなかった、しかし彼
女のリリスを想う気持ちは嘘偽りないものだろう。
なぜならその時の彼女の顔は愛おしい何かを守ろうとする決意のあ
る表情だったからだ。

マリアベル s i d e e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530x/>

碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

2011年11月10日10時17分発行